

NAIST ANNUAL REPORT



2025

無限の可能性が最先端

Index

- 3 学長挨拶
- 4 学長ビジョン 2030

J-PEAKS 特集

- 5-6 学長インタビュー
- 7-8 事業申請に携わった教員メンバー対談

NAIST TOPICS 2024-2025

- 9 MStEC NARA の設立
- 10 大阪・関西万博
けいはんな万博
- 11 咲いてく保育園を開所
- 12 ネーミングライツ・パートナー
テラスリニューアル
- 13-14 研究力強化の取り組み
- 15-18 学長×学生—女子大学との推薦入学制度
が拓く新しい学びの道
- 19-20 国際交流

研究科

- 21-22 先端科学技術研究科の3領域
- 23-24 情報科学領域(脳・行動モデリング研究室)
- 25-26 バイオサイエンス領域(環境微生物学研究室)
- 27-28 物質創成科学領域(機能無機材料設計研究室)
- 29-30 受賞
- 31-32 研究成果

財務情報

- 33-34 数字でみる NAIST
- 35-40 財務情報
- 41 奈良先端大を応援するカタチ
- 42 編集後記

MESSAGE

学長挨拶

持続可能な社会へ、 ここから

奈良先端大は、けいはんな学研都市という愛称で知られる関西文化学術研究都市の中核機関の一つとして、1991年に設立されました。特別法による国のプロジェクトとして、奈良県・京都府・大阪府にまたがる学研都市が生まれることになった契機は、ローマクラブが1972年に発表した「成長の限界」と題された報告書にまで遡ると言われています。人口増加や環境汚染が同じペースで続けば、100年以内にこの地球における成長は限界に達するとしたこの報告書は、世界的な注目を集め、今でいう「持続可能な社会」の構築が必要であることをいち早く指摘したものでした。

本学が理念として掲げる科学技術分野における高度な研究の推進や、社会や経済を支える人材の養成、そして学外の様々なステークホルダーとの連携や協力も、けいはんな学研都市がテーマとする「持続可能な社会」の実現に貢献することを目指すものです。すなわち、今を生きる個人、そして社会のwell-beingだけでなく、次の世代のwell-beingの実現にも貢献することが期待されています。そのために必要なのは、生活のあり方・社会経済のあり方を変えるような新しい技術だけではありません。「関西文化学術研究都市」という名称に「文化」という語が入っているのは、技術開発だけでなく、「文化開発」も重要であるという理念を示しています。

知の先端から社会へ

「科学技術」は日本語では一語として扱われることが多いのですが、本学の英語名称“Nara Institute of Science and Technology”で示されているように、Science（科学）とTechnology（技術）の両方を追求しているのが奈良先端大です。科学は技術を支え、創出するだけでなく、人類の知の地平を拡大していく「文化開発」の営みでもあります。このアニュアルレポートでは、本学における最新の科学研究、そして技術開発の成果の一端をご紹介します。

また、今回のアニュアルレポートのハイライトの一つは、本学が文部科学省J-PEAKS（地域中核・特色ある研究大学強化促進事業）の採択校の一つに選ばれたというご報告です。「学長ビジョン2030」を実現する具体のアプローチであり、また、わが国が直面する生産年齢人口の縮小という課題に対する取り組みでもある、一大プロジェクトが始まっています。奈良先端大における科学・技術研究のあり方、さらには産業界や地域との「共創」の変革にもつながるその進展は、来年度以降のアニュアルレポートでもお伝えしていきますので、本学のさらなる進化へのご期待とご支援をお願いいたします。

PRESIDENT'S VISION 2030

学長ビジョン2030

VISION

01

最先端研究の場で
先導的人材を育成する
大学院大学の新たな展開

VISION

03

社会との
共創の輪の拡大

VISION

02

新たな価値を共創する
キャンパスコミュニティ
の醸成

VISION

04

大学運営体制の高度化
による共創環境の整備



奈良先端科学技術大学院大学長

塩崎 一裕

研究大学のこれから

NAIST × J-PEAKS

Interview

学長インタビュー

今回、奈良先端大がJ-PEAKSに応募することになった経緯を教えてください。

文部科学省がそれまで実施してきた研究大学強化促進事業の後継として、このJ-PEAKSの公募が始まりました。大学を取り巻く状況は厳しく、この事業に採択される大学とそうでない大学のグループ分けの意味もあると言われる中、本学の生き残りには採択されることが絶対に必要という強い思いがありました。令和5年度の申請では残念ながら不採択となりましたが、先生方と共に「もう一度挑戦しよう」と気持ちを新たに、準備を進めました。

結果、令和6年度に採択されましたが、申請内容はどのように決まったのでしょうか。

本学の強みである東南アジアの大学との連携や、研究の自律化・データ活用などのアイデアは既がありました。ただ、それらを大きなビジョンのもと、大型支援にふさわしい提案と評価される形にどうまとめるかに苦労しました。そんな折、本学経営協議会の外部委員である藤沢久美さんとのオンライン意見交換で、「日本が直面する課題を考え、それにどう取り組むかという方向性が大切ではないでしょうか」というご指摘をいただきました。それまでは本学の持つ強みや学内のニーズを中心に考えがちでしたが、より広い視野を持って社会全体を見据える必要性に改めて気づかされ、考え方の大きな転機となりました。さらにワーキンググループで議論を重ね、わが国が直面する人口減少社会の課題の解決をテーマとする方向性が定まりました。

採択された大学の中では本学は比較的規模が小さい大学ですが、単独で申請した理由がありますか。

ある程度の規模がある大学の方が大きな成果、インパクトを生み出せるとアピールできる点で有利という見方もあり、実際、大学同士が組んで共同申請する例も多く見られました。したがって単独申請は、不利に働く可能性もありましたが、本学の強みを最大限に生かした「尖った」提案ができるという点では大きなメリットがあり、今回、単独での申請に挑戦しました。また、採

択された場合にも、他大学との共同申請では予算や計画の執行を大学間で連携を取りながら進める大変さがあると思います。

最後に、現在の取り組み状況とこれからの本学についてお聞かせください。

10年後のビジョンを掲げて申請することが求められた事業ということもあり、10年後の本学を担う中堅教授の方々を中心とするワーキンググループで事業実施の方針を議論しています。小規模大学の強みを生かした、研究領域の垣根を越えた全学的な体制を整えるため、学内組織の改編や人員の配置、新規設備の導入準備などを進めている状況です。今年10月23日にはNAIST J-PEAKSのキックオフシンポジウムを開催すべく、その準備にも取り組んでおり、教職員、学生の皆さんにも参加いただきたいと思います。

これから奈良先端大は、J-PEAKS事業を中心に大きな変革の時期を迎えます。常日頃から本学をさまざまな形で支援くださっているの方々には、今後の奈良先端大に、ぜひご期待いただきたいと思います。

(R7年7月インタビュー時の情報です)

J-PEAKSとは

「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)」は全国で25の大学が採択された、大学の研究力強化を支援する文部科学省の事業です。その予算は1大学あたり5年間で最大55億円。NAISTの今後を大きく変えることになるこのJ-PEAKS事業について、学長にお話を伺いました。

J-PEAKS事業で目指すビジョン

人口減少する社会を支えるために

人材育成

東南アジア諸国からの戦略的な人材リクルートと育成

システム構築

研究の自律化・自動化とデータ共有による社会実装

NEXT PAGE
事業内容の詳細

NAIST × J-PEAKS

J-PEAKS 事業対談

日本が直面する生産年齢人口の減少という課題に独自のアプローチを提案する

J-PEAKS 申請ワーキンググループのメンバーとして提案を取りまとめたバイオサイエンス領域の中島敬二教授(J-PEAKS 担当学長補佐)、物質創成科学領域の上久保裕生教授、データ駆動型サイエンス創造センターの藤井幹也教授、情報科学領域の林優一教授に事業の意義や10年後への展望について語ってもらいました。



情報科学領域 林優一教授

データ駆動型サイエンス創造センター
藤井幹也教授

物質創成科学領域 上久保裕生教授

バイオサイエンス領域 中島敬二教授
(J-PEAKS 担当学長補佐)

採択された奈良先端大の提案は、本学の研究の特色や実績、組織力をどのように反映させていますか。

中島教授

本学は、先端科学技術研究科という1研究科体制の中で、情報科学、バイオサイエンス、物質創成科学の3領域の研究が行われています。なかでも持続可能な社会を実現するための課題に取り組む研究者が多く、その分野の研究力が強いのが特徴です。また、小規模大学ならではの機動力を活かして、さまざまな改革を先頭に立って迅速に成し遂げてきた実績があります。

そこで、これらの特徴や強みを活かし、日本が直面する最大の課題である「少子化による生産年齢人口の減少」に取り組む「10年後のビジョン」を考えました。具体的な戦略は2つあります。1つ目は、日本の産学で活躍が期待される海外出身の優秀な人材を育成する取り組みです。海外の連携大学との豊富な交流実績を基に、日本と経済的・文化的な関わりが深い東南アジアから優れた研究人材を組織的にリクルートして、日本人学生と一緒に国際的視点をもつ研究・開発人材を育成します。

2つ目の戦略は、「研究の自律化・自動化と、高度な情報セキュリティに守られたデータ共有システム」の構築です。研究開発の自動化やAIを用いた自律化は、Automated Research Workflow、略してARWと呼ばれ、国際的な関心や経済界の投資意欲が急速に高まっています。本学では、この考えを普段の研究活動に取り込むとともに、本学の研究が日々生み出すデータを産業界が安心して検索できるセキュアなシステムを作ることで、効率的な社会実装につなげる仕組みを作ることを目指しています。

「東南アジア諸国からの戦略的な人材リクルートと輩出」の戦略については、どのようなところが実現のポイントになるのでしょうか。

中島教授

まず、優秀で日本社会に親和性をもつ人材をいかに選抜するかが重要なポイントになります。本学はすでに「留学生特別推薦選抜制度」を導入し、海外の連携大学から推薦された人材を予備選抜しています。また、本学の教員が連携校に出向いて広報やリクルート活動を行っています。連携先の教員だけでなく、本学を卒業した留学生の同窓会や、その国の教育機関や官庁との信頼関係に基づく組織的な連携を一層、密にする努力が大切です。

もう一つの重要なポイントは、キャリア支援です。本学では「キャリア支援室」が、留学生を含めた全学生の就職活動をサポートしていますが、特に留学生に対しては、グローバルなネットワークをもつ特任教員の先生がきめ細かな就職支援をしています。この取り組みをさらに強化するために、本学が輩出する人材の情報を提供する「NAIST人材バンク」を設立します。産官学の担当者が情報にアクセスし、留学生の希望やスキルに合ったマッチングを可能にすることで、日本で活躍する場を提供します。

「自動化・自律化とデータ共有による研究力と社会実装の強化」の提案は、3領域の強みを活かし、連携する戦略ですが、それぞれの領域でどのような点を重視されていますか。

中島教授

バイオサイエンス領域は、研究シーズを創出する段階の

担当で、将来の発展可能性や市場価値が高いと見られる素材のスクリーニングを自動化します。本学は、再生可能資源である植物バイオマス、廃棄物による環境汚染を未然に防ぐ生分解性樹脂などさまざまな研究が行われており、そのなかで、あらかじめ有効性を自動的に見極め、省力化することで、効率的な社会実装につなげます。

上久保教授

物質創成科学領域の役割は、最先端の研究シーズを社会実装可能な物質へと展開し、その開発に必要なデータを創出することにあります。この目的を達成するためには、自動合成、自動計測、自律設計という三つの技術が不可欠です。本学の強みである研究システムのRX(リサーチ・トランスフォーメーション)化を推進し、これらの技術を有機的に連携させることで、質の高いデータを着実に創出できる体制(ファウンドリ)を構築します。これは、自律的な研究推進という未来の課題に応えるための、新たなモデルを提示するものです。

林教授

本提案では、3つの領域が一体となってプロジェクトを推進する必要があります。その中で情報科学領域は、情報セキュリティ技術を提供する役割を担っています。本分野は情報科学領域の強みの一つであり、開学当初から高く評価されてきました。さらに、複数の学問分野が交差・融合して発展してきた学際的な領域でもあります。これまでに蓄積した知見を用いて構築される「セキュアなデータ流通プラットフォーム」は、本学の3領域を横断的に結び付ける融合基盤として機能することが期待されています。

最後に、J-PEAKS 事業で本学がどのように発展していくか。10年後の大学像について語ってください。

藤井教授

10年後は、人が集まる大学になってほしいと思っています。他大学の教職員や学生はもちろん、企業の人も行きたいと思う大学です。学外の方が「本学は研究レベルが高く、さらに教育環境も素晴らしい。多くのことが学べます」と耳にし、実際に本学で様々な共創が起きているのを見ることができるとは思いません。そのために我々は新しい学術を進化させる必要があるし、社会実装や社会貢献として社会を向いた活動をしていかなければならないと思います。

林教授

今回のJ-PEAKS 採択を機に、多くの教職員が力を合わせて本学の5年後、10年後を見据えた問題意識を持ち続けることが重要だと思います。そして、その時々を生じる課題に持続的に対応できる組織を構築していく必要があります。その実現に向けた取り組みの一つとして、3領域の密接な連携が挙げられます。領域間の連携で本学が対応できる課題の範囲を広げることで、これまで社会課題の解決に貢献してきた本学が、その能力をさらに進化させることが期待できます。

対談のフルバージョンは本学の広報誌「せんたん」に掲載されています！ 詳しくはこちら



MSTeC NARA

本学と奈良県立医科大学が
一般社団法人奈良先端医工科学連携機構を設立



What's MSTeC NARA

一般社団法人奈良先端医工科学連携機構(略称：MSTeC NARA[エムステックなら])とは、本学と公立大学法人奈良県立医科大学(奈良県橿原市)が協力して設立した一般社団法人です。本機構は、医学、工学および関連諸科学の分野において、両大学の緊密な連携を促進し、教育研究水準の向上と大学機能の強化を図ることを目的としています。この機構の設立により、次世代医療や医工連携分野でのイノベーションを創出し、地域社会の発展と医療技術の革新に寄与することが期待されています。本機構は、両大学がこれまでに築いてきた協力関係をさらに発展させ、医療・工学の融合による新たな価値創造を目指します。

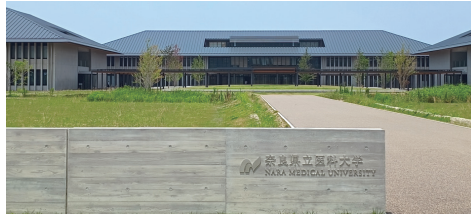
全国初！

医工連携を目的とした
大学等連携推進法人
として認定

大学等連携推進法人とは…2つ以上の大学等の設置者を社員とする一般社団法人で、それらの大学等の連携の推進を目的とするものとして、文部科学大臣の認定を受けたもの

奈良県立医科大学からのメッセージ

理事長・学長 細井 裕司



畝傍山キャンパス

両大学は、これまでも連携を通じて数多くの成果を上げてきましたが、本法人設立により、その取組がさらに強固なものとなり、新たなステージへと進化することを心強く感じています。本法人の使命は、「先端医工科学」の分野において、共創の輪を広げ、世界にそして地域社会に貢献する革新を生み出すことです。特に、臨床の現場と最新の工学技術との連携を深めることにより、より実践的で社会に即した研究や人材育成を期待しています。また、AIやデジタル医療などの新たな分野においても、奈良から世界へと発信する技術と知見を創り出していく所存です。東京では、2024年に東京工業大学と東京医科歯科大学が統合し、東京科学大学が誕生しましたが、本法人を通じた両大学の連携により、同大学に匹敵する成果が生み出せると確信しています。

About 奈良県立医科大学

1945年に県内唯一の医師養成機関として設立され、2004年には4年制の看護学科を開設し、1学部2学科の医科大学として着実に発展を続けています。本年は開学80周年という節目を迎えるとともに、4月には畝傍山キャンパスが開校しました。医学、看護学及び関連領域で活躍できる人材を育成し、国際的に通用する高度の研究と医療を通じて、医学及び看護学の発展を図り、地域社会に広く貢献しています。また、MBT(医学を基礎とするまちづくり)構想を展開しており、医学的知見を活かした産業創生にも貢献しています。

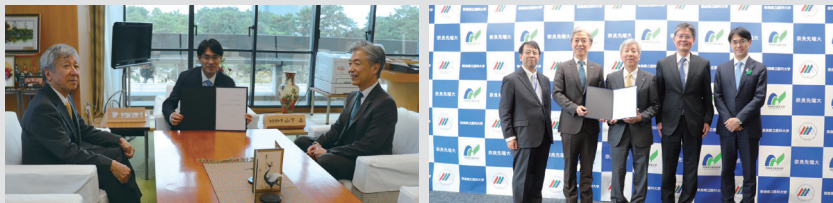
活動状況

設立記者会見を実施



記者会見では、当機構の設立の背景、目的、そして今後の展望についてご説明しました。(2025年1月27日)

山下真奈良県知事へ認定のご報告



山下知事からは、「本機構が奈良の“知”の拠点として成長し、県立医大と奈良先端大の研究者が互いに刺激合うことで、優秀な人材が奈良に根づくことを期待しています」と期待の言葉を寄せられました。(2025年4月2日)

大阪・関西万博 Expo 2025 Osaka, Kansai, Japan

2025年4月13日に開幕した「大阪・関西万博2025(EXPO2025)」に奈良先端大からも出展し、多くの国内外の方々へ本学の科学技術や研究成果について紹介する良い機会となりました。

最新情報や詳細はこちらから



ロボットラーニング研究室

松原崇充教授、佐々木光助教

AIとロボティクスを融合した技術を出展しました。AIを活用した自動化により労働力不足の解消や人間による作業の省力化等につなげることができます。万博ではAIとロボットの先端技術を体験することもできました。



万博会場にて

インタラクティブメディア設計学研究室

澤邊太志准教授

生駒市の魅力を広めるために生駒市の代表的な観光地をVR撮影し、万博来場者に生駒市の魅力を伝えました。専用ゴーグルを装着し、360度映像で高い没入感や臨場感を得ることができました。



VR撮影風景

サイバネティクス・リアリティ工学研究室

清川清教授

人間の能力向上を目指し、VR技術を活用した革新的技術を出展しました。若者が新しい技術や楽しい技術を実際に見て触れて、技術の社会展開や活用方法を考えてチャレンジする機会にもなりました。



食物の見た目を別の食物に変換する技術

植物代謝制御研究室

出村拓教授、永井健治教授 (本学CDG客員教授、大阪大学教授)

様々なメディアでも取り上げられた「光る植物」が“未来の侘び寂び”というコンセプトで出展され、行列の絶えない人気ぶりでした。万博来場者は柔らかい光の魅力を感じることができました。



光る植物(ポプラの幼木)

インタラクティブメディア設計学研究室

博士後期課程3年 秋吉拓斗さん

人間が生きる活力を得られるロボット展示「ROBOZOO～心を育むロボット動物園～」を出展し、万博来場者はキーウィロボットの産卵観察やペンギンロボットの餌やり体験を通して触れ合うことができました。



万博会場にて

けいはんな万博 2025

大阪・関西万博と連動して、「けいはんな万博2025」も開幕し、塩崎学長は運営協議会の座長を務めました。

研究推進機構 発酵科学研究室

高木博史特任教授

「ウェルビーイングフェスティバル」に酵母の研究成果を活用した企業との商品開発を紹介しました。特にクラフトビールは、健康イメージの付与を目的に、昨年の商品化(左)に続き、今回も新しい酵母を用いた商品化(右)が実現しました。

※所属は2025年9月現在のものです。



めっちゃ GABA

酔うたらええやん

NASC

(NAIST Science Communicators)

サイエンスコミュニケーションを通じ、多くの人に科学に親しんでもらうことを目的とした学生サークル「NASC」が「けいはんなアバターチャレンジ2025」に本学のマスコットキャラクターで様々な競技に参加しました。



NASURAの遠隔操作ロボット

生駒市認可の保育園

キャンパス内に「奈良先端大 咲いてく保育園」を開所

本学では教職員・学生の就業・修学と子育ての両立を支援するべく、かねてより保育所の整備を検討してきましたが、生駒市のご理解とご協力のもと、学内に認可保育園を設けることになり、2024年の創立記念日である10月1日に、「奈良先端大 咲いてく保育園」を開所しました。



0歳児から2歳児を対象に、留学生を含む大学構成員の子どものみならず、地域枠を設けることで、近隣の子どもたちも通園が可能な保育園です。実際に、入園した園児の7割は外国にルーツを持つ子どもたちで、奈良先端大ならではのユニークな保育園となっています。運営は社会福祉法人北倭保育園に委託し、経験豊富な保育士の先生方による手厚い保育のもと、ハラル給食などにも対応いただいています。

竣工式を開催

式では、はじめに塩崎一裕学長が開会の挨拶を行い、小紫雅史生駒市長より祝辞を賜りました。そして、保育所の設置に尽力くださった設計会社代表、建築会社代表、看板等のデザイナー、保育所事業基金への寄附者のお名前を掲示するドネーションツリー製作者、本学の前監事・理事、咲いてく保育園の名付け親である本学教員等来賓の方々をご紹介した後に、社会福祉法人北倭保育園の井藤一憲理事長より法人の沿革と咲いてく保育園の紹介がありました。「花開く」という保育所の名前のとおり、この新たな保育所を拠点として、これからたくさんの花が開くことが期待される式となりました。(2024年9月27日)



ドネーションツリーは保育園の玄関に設置しています。

咲いてく保育園

NAIST Daycare Scitech

保育園の名前は公募で決められ、大学の名称であるサイエンスとテクノロジーの一部を用いるとともに、子どもたちと教職員・学生の未来と新たなテクノロジーが「花開く」という意味が込められています。

BEFORE



ゲストハウスの1階部分にあった交流スペースを改修しました。



AFTER



奈良先端大と ネーミングライツ・パートナー



本学の教育研究環境の向上を図るために、将来にわたる新たな財源を確保し、自己収入の拡大促進を図ることを目的として、本学所有の施設等においてネーミングライツ・パートナーを募集しています。ネーミングライツ・パートナーとなることで地域及び社会への広告や宣伝効果、本学学生へのリ

クルート活動の促進等、本学との連携機会拡大等に繋がります。協定の期間は、3年以上で更新も可能です。大学とネーミングライツ・パートナーの相互にとって大きな影響を与え、今後の発展に期待することができます。

2024年度 実績

パナソニック IS 大講義室

2025年3月1日協定締結

(パナソニック インフォメーションシステムズ株式会社 x 情報科学棟1階大講義室)



2025年度 実績 (2025年9月までの協定締結)

TAKASAGO 研修ホール

2025年4月1日協定締結

(高砂香料工業株式会社 x 学際融合領域研究棟2号館研修ホール)



今後も新たなネーミングライツ・パートナー締結に向けて積極的に取り組んでまいります。

RENEWAL 屋外テラスリニューアル

長らく学生・教職員の憩いのスペースとされていた屋外テラスは、全面的にリニューアルすることとなり、リニューアルオープンに向けて着々と工事を進めてきました。

気になる！
ポイント

リニューアルオープンする理由は？

長らく利用され、老朽化が進んだからです。改修工事に伴い、学生・教職員がより利用しやすいテラスとなります。

気になる！
ポイント

前のテラスとの違いは？

木製からタイルブロック製となり、今後長く利用できるようメンテナンスの利便性が図られています。また、スロープを設けたバリアフリー仕様で、立地の起伏を活かしてベンチやカウンターとしても使えるような工夫が施されています。

BEFORE



AFTER



奈良先端大 咲いてく保育園 管理者

富 潤子先生に特別インタビュー



一保育士という道を選んだ理由

幼い頃、優しい保育園の先生と出会ったことがきっかけで、「人を助ける仕事」に憧れを抱くようになりました。さらに、姉が幼稚園教諭として働く姿を見て、子どもたちと関わる仕事をしたいという気持ちが大きくなりました。自分の得意なもののづくりや絵本の読み聞かせを活かしながら、子どもの成長を間近で見守ることができる保育の仕事に魅力を感じ、保育士を志しました。

一保育の仕事で大切にしていること

子どもたちにとって、保育園の先生は「親以外の大人」と初めて出会う存在になるので、「第二の居場所」として、安心して過ごせる環境づくりを大切にしています。その安心感の中で、子どもたちが自信をもってさまざまなことに挑戦できるように、そっと後ろから見守りながら、子どもたちの主体性を伸ばす保育を心がけています。

一咲いてく保育園の魅力

多国籍子どもたちが集う園で、文化や言葉の違いを越えて交流できるところが魅力だと感じています。保護者とのコミュニケーションでは、翻訳機を使ったり、手振りや身振りを交えたりしながら、互いに理解し合おうとする姿があり、「みんなで協力してやっていこう」という気持ちが共鳴し合う空間は、私にとって働く上でのやりがいにもなっています。

一これからについて

大学と法人とが協力し合い、それぞれの思いや強みも活かしながら、保護者の方が安心して仕事や学業に専念できる環境を作っていきたいと思っています。

保育所事業基金の詳細はここから



STRENGTHEN OUR RESEARCH

研究力強化の取り組み

卓越した研究・教育を行う大学院大学として、
魅力的な研究環境の整備や優れた人材の確保を進めています

若手研究者への支援・評価の取り組み

若手ネットワーク開拓ワークショップ

国内外の若手研究者のネットワーク構築、本学における研究活動の展開やリーダーシップを発揮するための活動を目的として 2015 年度から実施しているものです。本学の若手研究者が、内外から研究者を招聘してワークショップやクローズの場での議論を計画し、その実施のために必要な経費を支援しています。2024 年度は本制度により、2 名の若手研究者を支援し、制度開始以降 32 名の研究者に総額 30,386 千円の支援を行っています。

NAIST 千手・文殊プロジェクト

NAIST 千手・文殊プロジェクトでは、「はばたく次世代」応援寄付プログラム(第一三共株式会社)を活用し、本学の若手研究者の自由な発想に基づいた新しい研究を始めるための活動を広く支援し(フェーズ1)、続いて、採択された若手研究者が集い、お互いの研究を知ることにより、異分野融合研究を促し基礎研究を含めた新しい研究の開拓を目指す活動を支援すること(フェーズ2)で、若手研究者の基礎研究力のボトムアップを図ります。

2024 年度は 51 名の研究者に 15,200 千円の支援を行いました。

NAIST プレジデントフェロー

NAIST プレジデントフェローは、教員評価における評価が特に顕著な助教に対して、本学における教育研究、社会連携及び管理運営における活躍及び貢献を称える賞として、2023 年度より新設されました。2024 年度は、以下の 2 名が「NAIST プレジデントフェロー 2024」の称号を授与されました。

柏 祐太郎 助教(先端科学技術研究科情報科学領域)

加藤 匠 助教(先端科学技術研究科物質創成科学領域)

※職名は受賞当時のものです。

研究者・学生への起業支援

奈良先端大発スタートアップの認定

本制度は本学の研究成果又は人的資源等を活用して起業した企業への円滑かつ適正な支援を行うことを目的に、申請のあった対象企業を認定する制度で 2024 年度から開始したものです。認定したスタートアップ企業には、他企業への紹介又は他企業との共同研究等の仲介、本学主催のイベントや本学の広報誌又はホームページ等による広報、認定スタートアップのロゴマークの使用許可など、様々な支援を実施しています。2024 年度は以下 5 件を認定しました。

株式会社 mica、奈良・先端画像技術株式会社、MICBON 株式会社、LENZO 株式会社、mocomoco 株式会社



<https://www.naist.jp/sankan/content/ja/service/index.html#sv12>



産官学連携の取り組み

共同研究室制度

本学の研究および教育の活性化・高度化を推進し、社会との共創を進めるため、国内外の民間企業等との共同研究を積極的に行っています。個別のテーマ単位で取り組む従来型の共同研究にとどまらず、組織対組織の産学連携体制の整備を進めています。2024 年度からは新たに「超スマート社会実装共同研究室」がスタートしました。超スマート社会の実現を目指し、スマートホーム、スマートライフ、スマートシティに関する研究を統合的に進めることを目的とし、それぞれの要素技術を開発するとともに、共同研究者同士の連携を進めてまいります。

参画機関：トヨタ自動車株式会社、NTT 西日本株式会社、株式会社市浦ハウジング&プランニング

<https://www.naist.jp/sankan/content/ja/service/collabolab.html>



学生への支援

NAIST Granite Program / NAIST Granite-AI

本プログラムは、日本の科学技術・イノベーションの将来を担う存在である優秀で志ある博士人材、強いリーダーシップを持った自主性が高い AI 博士人材の育成に資することを目的としており、博士後期課程の優秀な学生を選抜し、経済的支援・研究費支援を行うとともに、キャリアパスの支援やキャリア開発スキルの向上を目指す各種プログラムを実施しています。NAIST Granite Program では月額 16 万 5000 円の研究奨励費、年額 40 万円の研究費を、NAIST Granite-AI では月額 25 万円の研究奨励費、年額 90 万円の次世代 AI 分野に関する研究プロジェクトのための研究費を支給しています。

※ NAIST Granite Program では、令和 8 年度以降採択の留学生に対して、令和 9 年度以降の研究奨励費が支給されません。



NAIST Granite
NAIST Granite-AI

<https://naist-granite.jp/>



女子大学との推薦入学制度が 拓く新しい学びの道

- 学長と推薦入学生が語る
挑戦とこれから -

富永 愛 さん

情報科学領域 | 情報セキュリティ工学研究室所属
昭和女子大学 | グローバルビジネス学部卒業

学長 塩崎 一裕

宮井 菜名子 さん

情報科学領域 | 数理情報学研究室所属
京都女子大学 | 現代社会学部卒業

本学では、塩崎学長の掲げる「多様性を高める」方針のもと、女子大学との協定締結や文系学生の受け入れ強化など、これまでにない層へのアプローチを進めています。今回の対談では、文系から理系大学院に進学した学生の経験や学び、そして学長が描く未来像を通じて、多様な人材育成に向けた取り組みをご紹介しますことを目的としています。

制度誕生の経緯

学長 まず、この推薦入学制度がどのように始まったのか、その経緯をご紹介します。

本学では、一般入試に加えて、留学生向けや高等専門学校向けの推薦入学制度を設けていましたが、国内の四年制大学からの特別推薦制度は存在していませんでした。その流れを変えたのが、昭和女子大学とのご縁です。昭和女子大学の理事長とお話した際に、「東京で育った女子大生に地方で学ぶ機会を」とのお言葉をいただき、そこから「推薦入学制度をつくりましょう」と話が進みました。協定は順調に実現し、ご縁が制度創設を後押ししました。その後、京都女子大学との協定も本学の教授のご縁からスムーズに締結されました。こうして女子大学を中心に連携が拡大し、現在は、国際基督教大学(ICU) などリベラルアーツ教育で定評の

ある大学からの受け入れにも取り組んでいます。このように多様な学生の受け入れを目指す背景には、二つの思いがあります。ひとつは、理系分野だけでなく、幅広い学びを経験してきた学生を迎え入れ、新しい視点を広く共有してほしいこと。もうひとつは、女子大学からの学生を積極的に受け入れ、女性理工系人材を増やすこと。これらが、本学がこの制度を推進している大きな目的です。本日は、この制度をとおして入学されたお二人にお越しいただいています。NAISTでどのような経験をされているのか等、ぜひ伺いたいと思います。

NAIST への進学のかきかけ

では最初に、この制度を利用してNAISTを選んだ動機を教えてください。

宮井さん(京都女子大学出身) 私は京都女子大学の現代社会学部に所属し、情報分野への関心から情報システム専攻を軸に経済学なども取り入れて多角的に学んでいました。その中で、NAISTで博士号を取得した指導教員のもと、ゼミの仲間と参加した機械学習のコンペティションをきっかけに初めて画像処理に触れ、関心が一気に高まりました。卒業論文を指導教員のご縁でNAISTと共同で進めた経験から「さらに画像処理を学びたい」と考えてNAISTへの進学を決めました。

富永さん(昭和女子大学出身) 私はもともとビジネスを専攻していましたが、大学二年生のときに参加したビジネスコンテストをきっかけにプログラミングやアプリ開発に関心を持つようになりました。在学中には、NPO法人「ワッフルカレッジ」で1年間プログラミングを学び、その中でセキュリティの重要性を強く意識するようになりました。ちょうどその頃、当時ゼミを担当していた先生から推薦入試によるNAIST進学という道があると同じ、NAISTがセキュリティ分野に強いと知ったことをきっかけに進学を決めました。

入学して感じたNAISTの特徴

実際に入学してみて、どんな印象を持ちましたか。

宮井さん 人との関わりの中で、良い意味のギャップを感じました。理系出身の方が多く中で文系出だったため不安もありましたが、理系の基礎知識が十分でなくても対等に接してくれる雰囲気がありました。入学後にしっかり学べる環境が整っており、居心地の良さを感じています。

富永さん 最初は授業で分からないことも多かったのですが、教授にすぐ相談できる環境がありました。アポイント不要で研究室に伺い、直接ご指導いただけるのは印象的でした。研究室では、文系寄りのテーマで受け入れられるか不安もありましたが、教授やメンバーが積極的に質問や意見を寄せてくれたことで、むしろ新しい視点を得ることができました。

苦勞と乗り越え方

修士1年(M1)の頃、授業や研究で苦勞も多かったと思いますが、どのように乗り越えましたか。

宮井さん 通常は先生にメールでアポイントを取り、質問していましたが、機械学習の基礎的な「系列データモデリング」の授業は特に難しく、研究室の仲間と協力して取り組みました。数学科や専門学校出身のメンバーに教わりながら問題を解き進め、互いに補い合うことで理解を深めました。

富永さん 最初は女子大出身ということもあり、男性学生の多い環境に慣れておらず、質問をためらって一人で抱え込みがちでした。そんな様子を見た研究室の仲間が声をかけてくれるようになり、分からないときは質問する、質問が少ないときは気にかけてもらう、といったやり取りを通じて関係が深まりました。必要な知識や自分に足りない点も、徐々に明確になっていきました。



そのほかに、NAIST で過ごして良かった点がありますか。

宮井さん 設備や資金が充実しており、研究を伸ばせる環境が整っていました。修士1年(M1)のときにはフィンランドの研究者と交流する機会もあり、NAISTに来たからこそ得られた経験だったと思います。また、優秀な仲間に出会って「分からないことがあって当たり前」と思えるようになり、質問を恐れず学べる姿勢が身につきました。

富永さん ゼミ発表を通じて「伝える力」が磨かれました。入学当初は、発表後に反応が少なく、どこが伝わっていないのか掴めませんでしたが、改善を重ねるうちに質問が増え、関心を引き出せるようになりました。男性と一緒に学ぶ環境は初めてでしたが、対等に関われることが印象的で、自分の世界が広がったと感じています。

今後のキャリア

これからのキャリアについて教えてください。

宮井さん 学部時代から一貫して画像処理に取り組んできた経験から、車載関連のソフトウェア企業から内定をいただきました。入社後は、センサー情報をもとに姿勢推定などを行う領域に携わる予定です。実務を通じて専門性をさらに高め、エンジニアとしてキャリアを築いていきたいです。

富永さん ビジネスコンテストに参加した頃から人材不足の解消に関心があり、その実現に資する職に就きたいと考えていました。現在内定をいただいている企業ではDX やクラウド領域の業務に携わる予定で、インフラエンジニアとして、学んできたセキュリティの知見を基盤から組み込みつつ、社会の人材不足を支える技術基盤づくりに貢献したいと思っています。



学長からのメッセージ

お二人のお話から、NAISTに入るまでの積み重ねと、入学後に磨いた専門性が、次のキャリアへと着実につながりつつあることが伝わってきました。大学として目指す姿を体現していただいております、大変心強く感じています。卒業生の活躍こそが大学の評価につながります。今後は推薦入学制度をさらに拡充し、広く知っていただけるよう取り組んでいきたいと思っています。この制度を通じて入学した学生が、ここでの学びを次のキャリアに結びつけ、社会で活躍していく。その姿が、NAISTの未来を築いていくと確信しています。



推薦入学協定大学

女子学生・文系学生の受け入れ促進

文系大学院に比べ、理工系大学院への女子学生の進学率はまだ低位にあり、理工系人材の多様性を向上させるとともに、女性の社会進出を後押しするべく、女子大学等との連携を通じて、女子学生の進学を積極的に支援しています。また、複雑化する社会課題と向き合うためには、理工系のみならず、人文・社会科学系の視点や知見が求められ、文系出身の学生にも門戸を広げる取組を進めています。

推薦入学協定(覚書) 大学

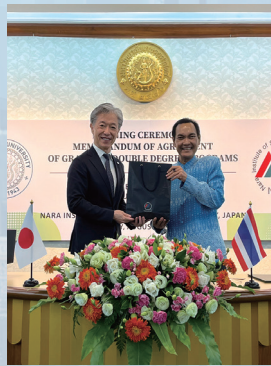
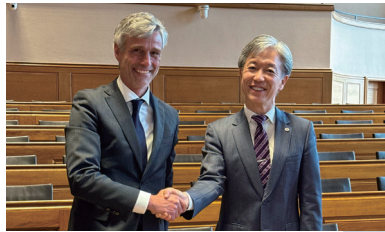
締結日	2022年12月	昭和女子大学
	2023年2月	京都女子大学
	2023年11月	大和大学
	2023年12月	国際教養大学
	2023年12月	国際基督教大学
	2023年12月	京都ノートルダム女子大学
	2024年8月	京都先端科学大学
	2024年9月	同志社女子大学

海外の機関との 連携強化に向けた取り組み

VARIOUS COLLABORATIONS WITH OVERSEAS INSTITUTIONS

学術交流協定・ダブルディグリープログラムの新規締結および更新について

2024年から2025年上半期にかけて、ハノイ科学技術大学(ベトナム)・SRM科学技術大学(インド)・国立台北科技大学(台湾)・ムハンマディアスラカルタ大学(インドネシア)・ベルン応用科学大学(スイス)・クイーンズ大学キングストン校(カナダ)と新たに6件の学術交流協定を締結し、エディンバラ大学(イギリス)やカールスルーエ工科大学(ドイツ)・マヒドン大学(タイ)・ガジャマダ大学(インドネシア)など合計26大学・機関との協定を更新しました。ダブルディグリープログラムについては、カセサート大学(タイ)との間で、博士後期課程を対象とする新たなプログラムを締結しました。また、既に締結していた博士前期課程のプログラムについては、対象となる研究領域を拡大しました。さらに、国立陽明交通大学(台湾)・チュラロンコン大学(タイ)との間では、協定の更新を行いました。今後も、国際的な学術交流の機会を充実させ、学生の学びと成長を力強く支援してまいります。



Departure 海外機関への訪問



2024年8月に、タイ・インドネシアの協定校や日本国大使館を歴訪しました。現地では本学の最新の取組を紹介する機会に恵まれ、さらなる交流・連携促進の可能性を探る有意義な訪問となりました。また、タイ同窓会のキックオフシンポジウムを開催するとともに、インドネシア同窓会の年次総会にも出席し、本学海外拠点との連携強化を図りました。2025年5月には、スイスのベルン州を訪問しました。奈良県とベルン州の友好提携10周年記念式典の一貫としてベルン応用科学大学との学術交流協定締結式を開催し、益々の連携強化への期待と、ベルンと奈良、双方の地域社会における学術交流の意義を共有しました。



Arrival 海外機関からの訪問

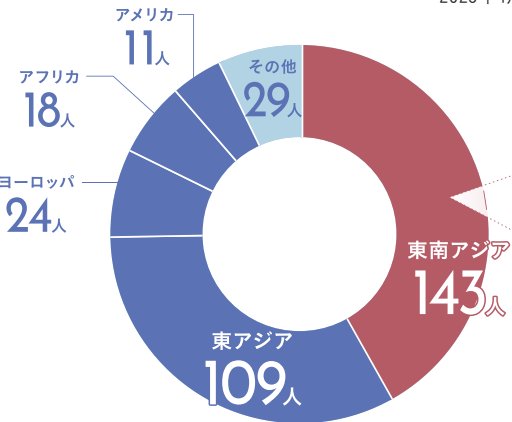


2024年から2025年上半期にかけては、駐日外国公館や本学の協定校から数多くの訪問団をお迎えし、活発な意見交換の機会を持ちました。これらの訪問を通じて、国際交流の現状や直面している課題、さらには今後の連携可能性について、幅広く率直な意見が交わされました。また、相互の教育・研究活動に対する理解を一層深めるとともに、具体的な分野ごとの協力の方針についても、前向きかつ建設的な議論がなされました。特に、共通の課題や連携の必要性に関する認識が共有されたことにより、これらの交流が単なる情報交換にとどまらず、実質的な連携の第一歩として極めて有意義なものとなりました。今後も、こうした対話と協力を積み重ね、信頼関係を土台としながら、相互理解と継続的な交流の深化に努めてまいります。



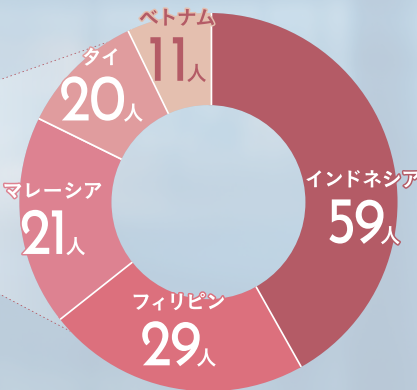
在籍留学生数内訳

2025年4月1日時点



東南アジア「J-PEAKS」連携5か国の出身者数内訳

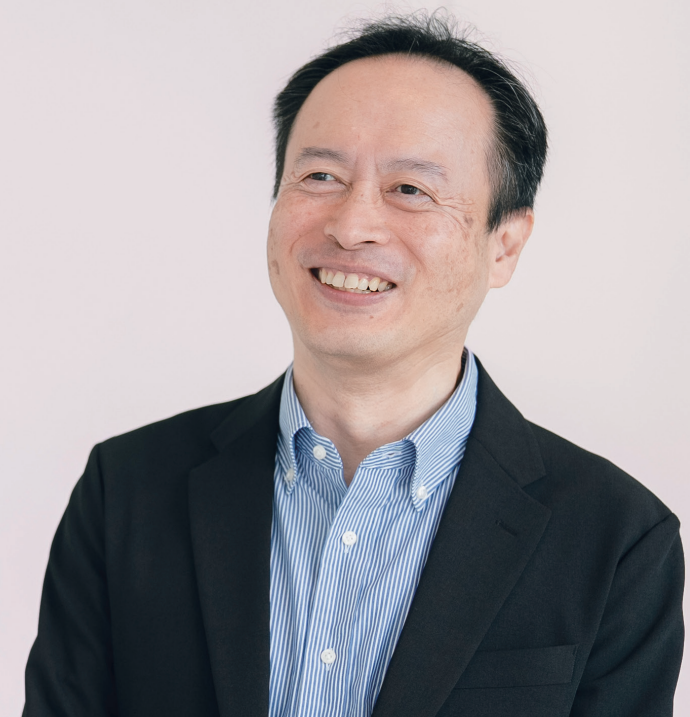
タイ/インドネシア/マレーシア/フィリピン/ベトナム



DIVISION OF INFORMATION SCIENCE

情報科学領域

最先端の情報科学技術の創造と、次世代の情報化社会を担う教育研究を推進する



情報科学領域長
笠原 正治

DIVISION OF BIOLOGICAL SCIENCE

バイオサイエンス領域

持続可能で豊かな未来社会の実現を目指し、社会の多様なニーズに応える



先端科学技術研究科長
バイオサイエンス領域長
出村 拓

DIVISION OF MATERIALS SCIENCE

物質創成科学領域

物質科学の先端と融合領域に挑戦し、社会へ知識と技術を還元する



物質創成科学領域長
上久保 裕生

脳・行動モデリング研究室

田中 沙織 教授



RESEARCH CONTENT

研究内容

私たちの研究室では、人間の行動や心理のしくみを、脳の情報処理に基づく数理モデルにより明らかにする「計算神経科学」のアプローチで研究を進めています。その一つが、精神疾患を対象とした計算神経科学的アプローチです。具体的には、患者の症状や意思決定問題での行動を強化学習などの数理モデルで説明しようとするものです。モデルから導かれる学習パラメータに着目することで、これまで強迫症の治療のメカニズムを理論的に説明し、治療効果の事前予測という可能性を提示しました。現状の臨床では、どの治療法がその人に合うかを事前に判断する手段は限られていますが、行動モデルを用いた評価によって、より精度の高い治療選択が可能になると考えています。今後は、患者ごとに適した治療を導く支援技術の開発を進めていきたいと思っています。



これまで私たちが実施した研究では、健常の参加者においても行動モデルの学習パラメータにばらつきが観測されました。特定のパラメータ傾向をもつクラスでは、脳活動や心理的な個人特性にも違いが見られました。これは、計算論的アプローチによって、疾患に限定されない人間全体の個性や多様性を可視化できる可能性を示しています。現在は、思春期の行動や日常生活における行動と学習パラメータの関係を、大規模なコホートデータを用いて分析しています。こうした研究には、特定の仮説に依らず、AIを用いて特徴を抽出する「データ駆動型」の手法が有効です。私は、国内の脳画像データベースの整備にも携わっており、標準化や運用設計、個人情報保護など、基盤構築の面からも研究を支えています。



STUDENT PROJECTS

学生の取り組み

博士後期課程2年 佐野 海士さん

私はコロナ禍をきっかけに、「人が不確かな状況でどのように情報を受け取り、判断し、行動するか」という問いのもと、これまで個人が持つリスク認知やリスクテイキング行動の個人差について研究してきました。最近では、誤情報・偽情報が社会に与える影響や、その拡散・修正に関わる心理的メカニズムにも関心が広がり、現在は研究の計画を進めています。

不確実性下での情報処理やバイアスの解明を通じて、社会における誤情報問題への実証的なアプローチを展開したいと考えています。将来的には、認知科学・行動科学の知見を基に社会課題の解決や政策提言に貢献することを目指し、シンクタンク等でのキャリアも視野に入れています。多様な背景を持つ仲間と自由に議論できる研究室の環境に、日々大きな刺激を受けています。

FUTURE PROSPECTS

今後の展望

人を対象とした脳研究の多くは、制御された実験室環境において、単純化した問題に対する脳活動や行動を計測しています。一方、私たちの日常での行動は、複雑な環境で必要な情報を取捨選択した結果のものであり、より多様な個人特性が現れると考えています。現在研究室では、動画視聴やゲーム中の行動、スマートフォンの利用ログといった自然な行動データと、私たちが構築してきた数理モデルを組み合わせることで、その人の心理状態や認知特性をリアルタイムで推定する方法を探っています。

これらの取り組みにより、自身の心や身体の状態を、日常生活の中で継続的に、かつ高精度にモニタリングできるシステムの実現を目指しています。こうした技術は、医療や教育の現場のみならず、日常の中での自己理解やセルフケア、そして早期支援にもつながると期待しています。

さらに詳しく
知りたい方はこちら！研究室HP
<https://cbns.naist.jp/>情報科学領域HP
<https://isw3.naist.jp/home-ja.html>

環境微生物学研究室

吉田 昭介 教授



RESEARCH CONTENT

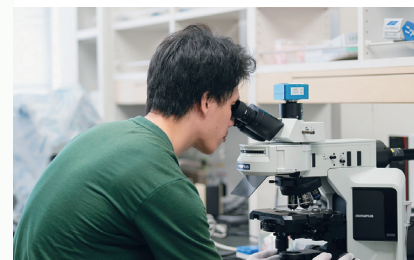
研究内容

PET(ポリエチレンテレフタレート)などのプラスチック廃棄物は、自然環境に深刻な影響を与えており、その処理は世界的な課題となっています。従来のリサイクルや焼却では膨大な量の廃棄物に対応しきれず、より根本的な解決策が求められています。私たちは、PETを分解・代謝できる細菌 *Ideonella sakaiensis* の研究からその糸口を探っています。この細菌はPETリサイクル工場から見つかったものですが、特殊な酵素を持っており、これらを使ってPETを分解することができます。



実験的には、フィルム状のPETにこの細菌を加えて培養すると、フィルムの表面に無数のくぼみが確認されるようになります。まずは、この分解の仕組みを明らかにすることから始めました。初期の研究で、PETを加水分解する酵素を2つ見つけました。1つ目はPETase、2つ目がMHETaseと命名しました。PETaseはポリマーであるPETを大雑把に分解し、MHETaseはPETaseによって分解され生じたMHETという分子を分解することで、PETは完全に加水分解されます。

この細菌はPETの加水分解によって生じたテレフタル酸とエチレングリコール(PETを合成するための原材料です)を代謝する能力を持ち合わせていることから、「発酵生産」の可能性を模索しています。つまり、PETごみを発酵原料に有用化合物を生産できれば、ごみが資源に変わるという発想です。これまでに、この細菌に難分解性であるPETを食べさせ、その代謝産物として、生分解性プラスチックを生産させることに成功しています。



STUDENT PROJECTS

学生の取り組み

博士前期課程1年 小見山 慧史さん

私は、微生物を活用してプラスチック廃棄物を資源として再利用する研究に取り組んでいます。身の回りにあふれる使い捨てプラスチックを、再び価値あるかたちで循環させるしくみを構築することを目指し、日々実験に励んでいます。遺伝子の知識がほとんどないところからのスタートでしたが、先生や先輩方に支えられながら実験と向き合い、少しずつ理解を深めてきました。自分の手で新たな循環の仕組みづくりに関わっていることに、大きなやりがいを感じています。

この研究を通じて、人として、そして研究者として、環境とどう向き合うかを深く学びたいと考えています。将来は、思いやりをもって技術と社会をつなぎ、環境にも人にもやさしい未来のあり方をかたちにできるような研究者を目指して、これからも着実に力をつけていきます。



FUTURE PROSPECTS

今後の展望

プラスチック分解菌の研究は、微生物学と高分子化学の境界に位置する新たな学際領域であり、大きな発展の可能性を秘めていると考えています。私たちは現在、分解菌が持つ酵素や代謝の仕組み、それらを活用したPETリサイクルやアップサイクルの実現を目指しています。しかし同時に、こうした研究が、生命の進化のような壮大なテーマに対しても示唆を与えるのではないかと感じています。地球の誕生以来、いかに難分解な物質であっても、長い年月の中で最終的には炭素循環の中に組み込まれてきました。今まさに、私たちの目の前でそのような「進化」が起こっているのかもしれない。

生物は、周囲の環境や物質に適応しながら、ときに勝ち、敗れ、あるいは何とかしのぎながら生命をつないできました。そうした生命のたくましさや知恵を、研究を通じて学びたいと考えています。



さらに詳しく
知りたい方はこちら！

環境微生物学研究室 HP
<https://bsw3.naist.jp/ssk-yoshida/>



バイオサイエンス領域 HP
<https://bsw3.naist.jp/>



機能無機材料設計研究室

後藤 知代 教授



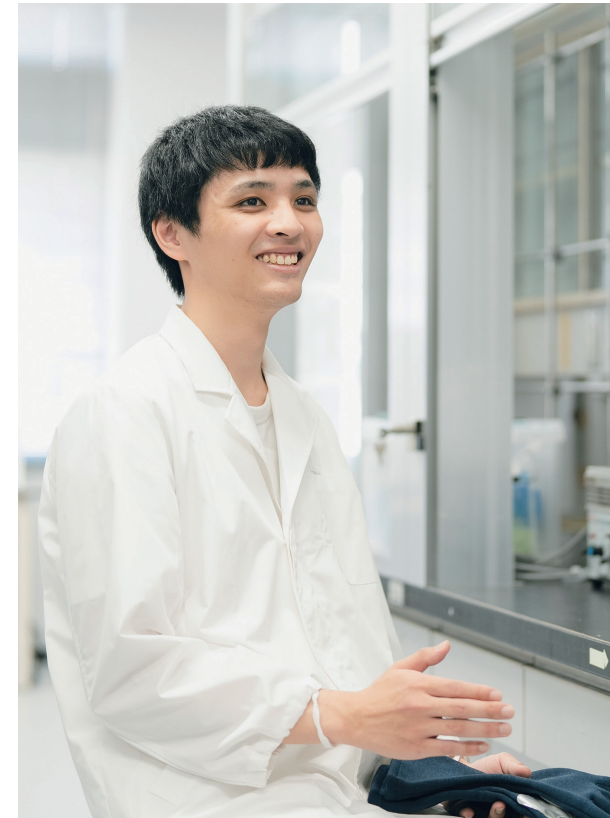
RESEARCH CONTENT

研究内容

セラミックスは、非金属の無機固体材料であり、幅広く社会で利用されています。当研究室では、このセラミックス材料を溶液内で合成する研究に取り組んでいます。一般にセラミックスは、陶磁器や煉瓦でイメージされるように、数百～千数百度の高温で焼き固めて製造されます。この方法では、微細な結晶粒子が強固に結合した緻密で硬い材料が得られます。一方、溶液を反応場として結晶を成長させる合成方法では、さまざまな組成、サイズや形態をもった結晶の粉末を得ることが可能です。結晶はその特性に応じて様々な機能を示すため、目的の機能をもつセラミックス材料を得るためには、その結晶粉末の合成方法の設計が重要となります。私たちは、密閉した高温・高圧の環境下での溶液反応を利用する水熱合成法に注目して、さまざまな結晶の合成に取り組んでいます。



生命と社会を支えるかけがえのない存在として「水」があげられます。きれいな水をつくり、水源や周辺の環境を汚さないためには、水質浄化処理が必要不可欠です。セラミックス材料は、水に含まれる汚染物質の吸着材としても利用されています。当研究室では、水処理の機能の向上や選択的に汚染物質の除去を目指した吸着材の開発研究にも取り組んでいます。例えば、吸着材の結晶構造と汚染物質の除去量との関係解明や、結晶サイズを小さくすることで反応性を高める研究を進めています。吸着材となる結晶の構造、サイズや形態を作り分ける方法としては水熱合成法を利用しています。



STUDENT PROJECTS

学生の取り組み

博士前期課程1年 田茂 京介さん

私は、学部において機械工学を学ぶ中で結晶構造に興味を持ち、材料の本質的な部分をより深く追求したいと考えて、機能無機材料設計研究室を選択しました。現在は、層状構造の結晶を用いた水質浄化材料の研究に取り組んでいます。私はこれまで、化学の実験経験がなかったため最初は不安もありましたが、先生から直接教わりながら装置の使い方から実験方法などを基礎から学んでいます。未経験でも取り組みやすい環境であり、様々なバックグラウンドを持った学生から刺激をもらいながら研究に取り組んでいます。

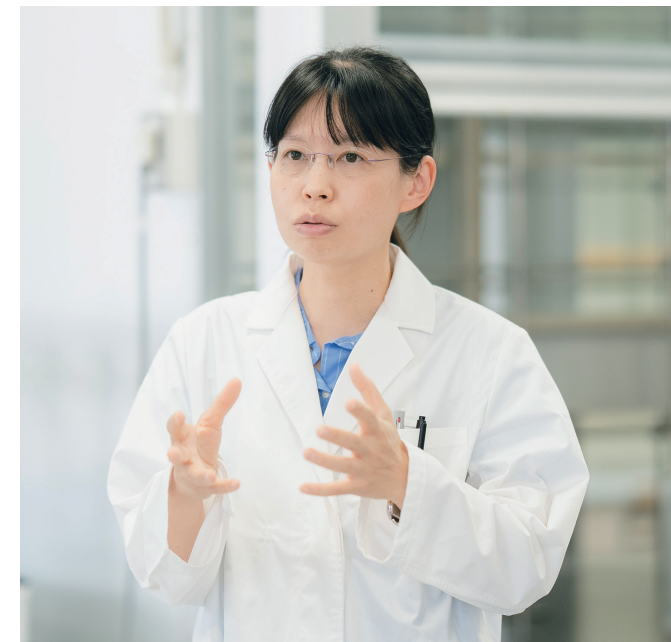
私は、今年から始まった新しい研究室の一員として、研究室の環境づくりにも主体的にかかわり、自らの成長だけでなく研究室の発展にも貢献していきたいと考えています。

FUTURE PROSPECTS

今後の展望

当研究室は、2025年4月からスタートした新しい研究室です。後藤の着任に伴い実験室と学生居室を新たに整備してもらい、現在は研究環境を整えつつ合成実験を開始しています。まだ備品や分析装置が不足していますが、学内にはさまざまな共用の分析装置や設備が整っているため、それらを活用しつつ研究を進めたいと考えています。

今後は、この場でご紹介した水質浄化の研究だけでなく、溶液反応を利用した結晶合成技術の研究を通して、医療や環境、資源・エネルギー、センシングなどの応用を目指して持続可能な社会構築に貢献できる機能性セラミックスの研究に取り組みたいと考えています。



さらに詳しく
知りたい方はこちら！

物質創成科学領域 HP
<https://mswebs.naist.jp/>



研究室 HP 鋭意作成中！

受賞

受賞歴は、本学の教育・研究の質の高さが外部から認められた証であり、大学の信頼性や社会的評価の向上に大きく寄与します。また、国内外の機関との連携促進や優秀な学生・研究者の獲得にもつながる重要な成果であり、今後の発展に向けた大きな礎となります。その他の受賞は「SENTAN web」にて公開しています。ぜひご覧ください。



情報科学領域

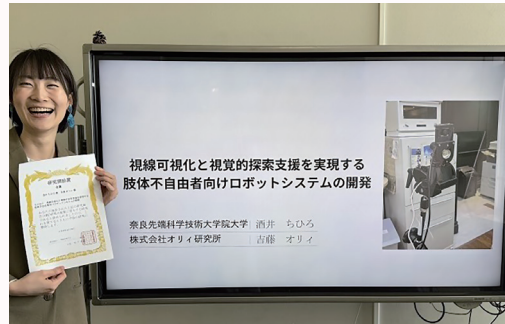
DIVISION OF INFORMATION SCIENCE

サイバネティクス・リアリティ工学研究室 酒井ちひろさん（博士前期課程1年）が、第75回エンタテインメント コンピューティング研究発表会において**研究奨励賞（金賞）**を受賞

一般社団法人情報処理学会（IPSJ）のエンタテインメントコンピューティング研究会（SIGEC）



本研究発表会は、一般社団法人情報処理学会(IPSJ)のエンタテインメントコンピューティング研究会(SIGEC)が主催するもので、「新しいエンタテインメントを創造するための技術研究」や「面白さの評価・解明」、「教育・福祉・運動などへの応用研究」を目的とし、エンタテインメントコンピューティング分野の発展を牽引する研究成果の発表と議論の場となっています。第75回エンタテインメントコンピューティング研究発表会(SIGEC2025)は、2025年3月17日から19日にかけて京都大学にて開催されました。



酒井さんが発表した研究「視線可視化と視覚的探索支援を実現する肢体不自由者向けロボットシステムの開発」は、視線によって操作可能なロボットを用いて、重度の肢体不自由者が周囲の状況を把握し、視線の可視化を通じて意思や関心を他者に伝えることを可能にするものであり、その独創性と社会的意義が高く評価されました。今回の受賞を契機に、今後さらなる研究の進展と実社会への応用が期待されます。

受賞者のコメント

今回はこのような賞を賜り、大変光栄に存じます。ユーザビリティ評価に参加していただいた方々、オリイ研究所の皆様、開発スキル伝授やイベント参加など様々な経験をさせてくださった吉藤オリイ様、そしてインターンシップへの参加を後押し下さったサイバネティクス・リアリティ工学研究室内の先生方に深く感謝申し上げます。今後はこのシステムに関する研究開発をオリイ研究所との共同研究として継続し、より多くの皆様にお使いいただけるよう、発展させていきたいと思ひます。

バイオサイエンス領域

植物再生学研究室の池内桃子特任准教授が EMBO Young Investigator に選出

欧州分子生物学機構（EMBO）



本事業は、欧州分子生物学機構(EMBO)が生命科学分野の若手研究室主宰者をEMBO Young Investigatorとして選出し、ネットワーキングやキャリア構築を重点的に支援する枠組みです。EMBOと科学技術振興機構（JST）との連携により、今年からJSTのプロジェクト代表をつとめる研究者の一部に申請資格が与えられました。日本の研究機関に所属する研究者がEMBO Young Investigatorとして選出されるのは初めてであり、採択者の中で池内桃子特任准教授がフィーチャーされた記事が公開されています。

物質創成科学領域

DIVISION OF MATERIALS SCIENCE

マテリアル研究プラットフォームセンターの 西川嘉子技術専門職員が文部科学省の 「令和7年度科学技術分野の文部科学大臣表彰研究支援賞」を受賞

令和7年度科学技術分野の文部科学大臣表彰研究支援賞



質量分析(MS)は、分子をイオン化し、質量電荷比(m/z)によって分離・検出する分析手法であり、化合物の構造解析に不可欠です。従来の電子イオン化(EI)や化学イオン化(CI)に加え、近年ではエレクトロスプレーイオン化(ESI)やマトリックス支援レーザー脱離イオン化(MALDI)などのソフトイオン化法が発展し、多様な化合物の測定が可能になっています。また、装置の分解能や感度の向上により、より精密な分析が実現しています。これにより、試料ごとに適切なイオン化法を選択し、イオン化効率や検出感度を最適化する技術が重要となっています。本業績では、多様な試料に対応するため、適切なイオン化法の選定と質量分析装置の電圧設定・チューニングを行い、年間約1000件の測定を実施しました。これにより、利用者のニーズに応じた測定条件の最適化を進め、適切な装置の選定を支援するとともに、マテリアル研究プラットフォームセンターへの質量分析装置群の円滑な導入・運用を実現しました。これらの成果は、多くの研究に貢献し、共著論文として発表されるとともに、謝辞として多数の論文で言及されています。加えて、得られた知見を学内外の講習を通じて共有し、技術の普及と人材育成にも取り組んでいます。

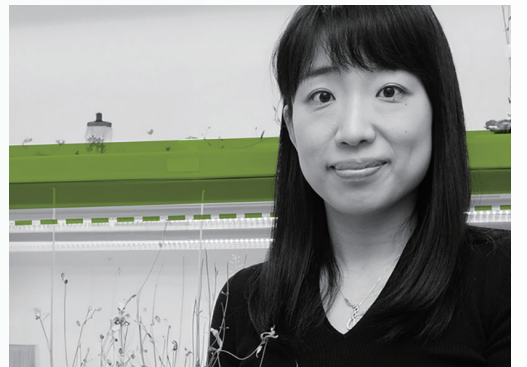


受賞者のコメント

このたび、文部科学大臣表彰という身に余る栄誉を賜り、大変光栄に存じます。日頃よりご助言・ご指導を賜っております浦岡先生、河合先生をはじめ、マテリアル研究プラットフォームセンターの先生方、技術室の取りまとめや先生方への交渉などいつもお力添えいただいている小池さん、物質技術職員室の皆様、そして私のこだわりの測定にお付き合いいただいている物質創成科学領域の研究室内の先生方や学生の皆様に、心より感謝申し上げます。また、私の仕事を理解し、支えてくれる家族にも深く感謝いたします。今回の受賞を励みに、これまでの経験を生かしなが、本学のさらなる発展に貢献できるよう努めてまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

受賞者のコメント

JSTが研究者の国際活動を支援する一環でEMBOと連携を結んだことで、今回より我々日本の研究者にもEMBO YIPへの応募資格を与えて頂けたことに深く感謝しております。また、このチャンスを活かして採択して頂くことができ、率直に非常に嬉しひです。EMBOネットワークの一員として、ヨーロッパを拠点とする研究者を中心に交流を広げ、国際的な活動を展開していけるよう尽力していきます。私の採択を機に、日本の研究者にもこういったチャンスがあるんだということを知っていただいて、次年度以降も多くの方が積極的に挑戦してくれるよう期待しています。



研究成果

学生・研究者が一体となった取り組みから生まれる研究成果は、世界的な学術誌での発表や国際会議での報告に加え、共同研究や社会実装へと広がりを見せています。最新の研究成果は大学公式ホームページ「プレスリリース一覧」ページにて公開しています。ぜひご覧ください。



情報科学領域

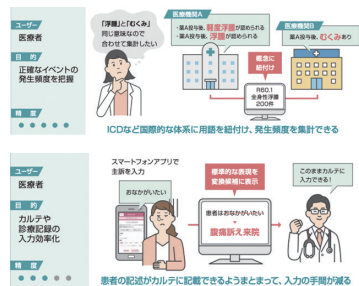
DIVISION OF INFORMATION SCIENCE

医療データをコンピュータで解析し、適格な関連情報を提供する 大規模医療辞書を開発 核となるデータ「JMED-DICT mini」を公開 ～医療支援システムの基盤として幅広い利活用に期待～

荒牧 英治教授

荒牧英治教授を責任研究者とした共同研究グループは、医療データ活用を促進するための大規模医療辞書「JMED-DICT」(<https://sip3-d2.naist.jp/jmed-dict.html>)の開発を進めています。膨大な医療データから、情報科学の自然言語処理技術などにより、医療用語を抽出し、分類・整理して国際的な医療統計基準などと紐づけることで、医療者らに関連する医療データを提供する辞書です。

今回、そのコア部分(約1万語)を「JMED-DICT mini」として公開しました。JMED-DICTは、研究機関での医療データ解析や、診断支援、医療の質や効率を向上させるDX(デジタルトランスフォーメーション)化などの医療アプリケーションへの応用を目的に設計されています。これまでにない広範な医療用語・医学概念を収載したこの辞書は、将来的に医療支援システムの基盤として活用されることが期待されます。



バイオサイエンス領域

花を咲かせる時期を遅延させる新規低分子化合物を発見 春化に関わる遺伝子の脱抑制の機構を解明

～植物の成長タイミングを自在に操作し、環境の変化に耐える作物を得る技術開発～

白川 一助教、伊藤 寿朗教授ら

植物が冬の低温にさらされることにより、開花の準備を始める春化(注1)という現象について、この春化の抑制に関わる遺伝子の働きを促進することにより、花を咲かせる準備時期を遅延させる脱春化誘導化合物(Devernalizer, DVRs)を世界で初めて同定しました。さらに、モデル植物のシロイヌナズナを使った実験により、DVRsが遺伝子に作用する機構を分子レベルで解明しました。

(注1) 春化：植物が長い冬を経験した結果、花芽形成能を獲得すること。



物質創成科学領域

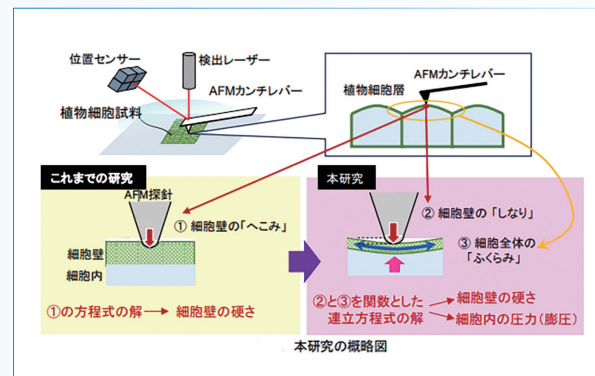
DIVISION OF MATERIALS SCIENCE

生きた植物の形を支える細胞内圧力と細胞壁の硬さを同時に調べる方法を開発 細胞の「ふくらみ」や「しなり」を高性能顕微鏡で測定して数値化 ～植物の成長過程の形態変化や環境適応の仕組み解明に期待～

細川 陽一郎教授ら

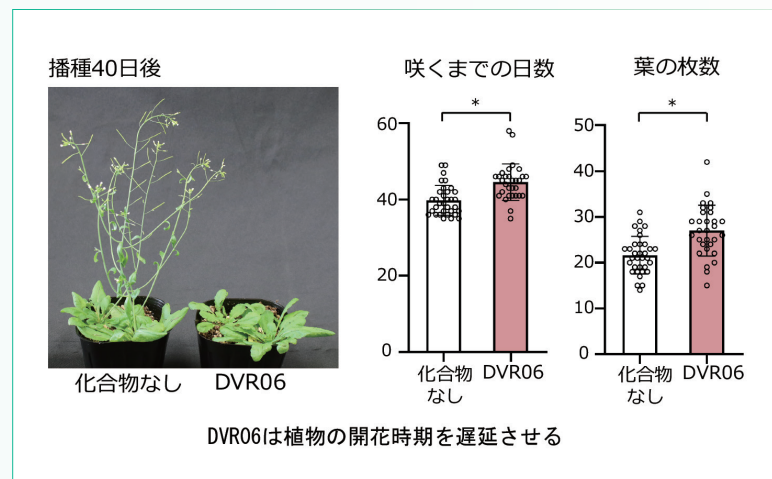
生きた植物細胞の「細胞壁の硬さ」と「細胞内の圧力(膨圧)」を同時に測定できる新しい方法が開発されました。植物細胞は、細胞壁の硬さと膨圧のバランスによって形を保っています。今回の研究では、原子間力顕微鏡(AFM)を用いて細胞表面の“へこみ”や“しなり”、さらに細胞全体の“ふくらみ”を計測。そのデータを数理的に解析することで、これまで困難とされてきた「生きた細胞における膨圧と細胞壁硬さの定量化」に成功しました。この手法の確立により、植物が成長の過程や環境の変化に応じて、どのように細胞の力学特性を調整しているのかをより詳しく捉えることが可能となりました。

本研究により、「植物細胞の膨圧は約10気圧に達する」というこれまでの推定が数値的に裏付けられました。また、環境の変化によって膨圧が大気圧近くまで下がり、細胞が柔らかくなる様子も定量的に示されました。さらに、“しなり”から推定された細胞壁の硬さは、従来“へこみ”で得られていた値の100倍以上にのぼることが判明。細胞壁が、ティッシュペーパーを押したときの柔らかさと、引っ張ったときの強さという二面性を併せ持つことが明らかになりました。こうした成果は、植物細胞の力学的な仕組みをより深く理解する手がかりとなるだけでなく、環境に適応した工業材料や医用材料の開発など、幅広い応用につながることが期待されています。



DIVISION OF BIOLOGICAL SCIENCE

植物が花を咲かせる時期を促進させる研究は多く行われてきましたが、花を咲かせるためのプログラムを一旦停止して開花時期を遅らせる仕組みはほとんどわかっていませんでした。研究グループは、花を咲かせる時期を遅延させる新規低分子化合物を探索し、特定の分子構造の化合物が春化の抑制に関わる遺伝子の働きを促進することをつきとめ、DVRsを同定しました。これらの化合物は、植物が花を咲かせる時期を遅延させる仕組みの理解のみならず、人為的に植物が花を咲かせる時期を遅延させる技術の開発にも繋がります。



DVR06は植物の開花時期を遅延させる

数字でみるNAIST

本学の教育研究活動の規模や実績などを表す数字をご紹介します。

OVERVIEW

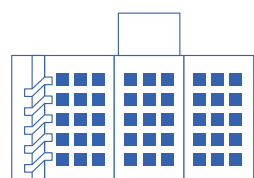
大学全体

キャンパス

キャンパス数 **1** 個

キャンパスの広さ

131,267 m²
(東京ドーム約2.8個分)



キャンパス内の建物数 **18** 個

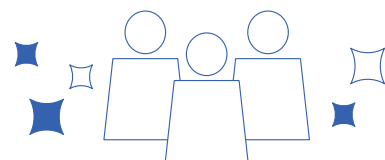
職員

以下 2025 年 5 月現在の情報

教職員数 **369** 人

教員数 **203** 人

事務職員等の人数 **158** 人



EDUCATION

教育

研究科・領域

1 研究科



3 領域

在籍者数等

以下 2025 年 5 月現在の情報

入学定員総数 **502** 人

うち博士前期(修士)課程: 390 人,
博士後期(博士)課程: 112 人

収容定員 **1,066** 人

うち博士前期(修士)課程: 740 人,
博士後期(博士)課程: 326 人

現員総数 **1,203** 人

うち博士前期(修士)課程: 778 人,
博士後期(博士)課程: 425 人

推薦入学
協定大学数 **8** 大学



RESEARCH

研究

外部資金獲得状況

以下 2025 年 2 月現在の情報

外部資金
受入件数 **552** 件

うち民間等との
共同研究件数 **165** 件

その他の競争的
研究資金件数 **8** 件

受託研究件数 **109** 件

科学研究費
補助金等 **184** 件

寄附金件数 **86** 件

INTERNATIONAL ACTIVITIES

国際

留学生

以下 2025 年 4 月現在の情報

留学生数
334 人

うち国費留学生

116 人

プログラム

ダブルディグリー
プログラム協定締結校数

6 大学

うち 博士前期
(修士) 課程 **1** 大学

博士後期
(博士) 課程 **6** 大学

研究者受入・派遣

海外からの
研究者受入数

98 人
(2024 年度実績)

海外への
研究者派遣数

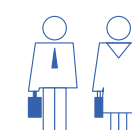
340 人
(2024 年度実績)

CAREER PATHS

進路

就職

就職率
98 %



就職力ランキングにおいて・・・

〳 行動力 〳 項目 〳 主体性 〳 項目 〳 チャレンジ精神 〳 項目

全国 **1** 位

全国 **3** 位

全国 **1** 位

総合ランキング 近畿
地区で **5** 位

※出典: 日経キャリアマガジン特別
編集 価値ある大学 2022-2023 就職
力ランキング(2022 年 6 月発行) より

財務情報

Financial Report

資産等の現状

貸借対照表(2024年度)				
単位:百万円				
資産の部	R6年度	(R5年度)	増減	
固定資産				
土地	9,276	(9,276)	0	
建物・構築物等	9,357	(9,730)	▲373	
工具・器具及び備品等	3,149	(3,187)	▲38	
図書	447	(488)	▲40	
その他の固定資産	496	(405)	90	
固定資産 計	22,728	(23,090)	▲362	
流動資産				
現金及び預金	4,718	(3,643)	1,074	
未収入金等	121	(164)	▲43	
その他の流動資産	39	(35)	3	
流動資産 計	4,878	(3,843)	1,035	
資産 計	27,607	(26,933)	673	
負債の部	R6年度	(R5年度)	増減	
負債 計	4,340	(4,126)	213	
純資産の部	R6年度	(R5年度)	増減	
資本金	18,624	18,624	0	
資本剰余金	▲978	(▲571)	▲407	
利益剰余金	5,620	(4,753)	866	
当期末処分利益	961	(361)	600	
純資産 計	23,266	(22,806)	459	
負債・純資産 計	27,607	(26,933)	673	

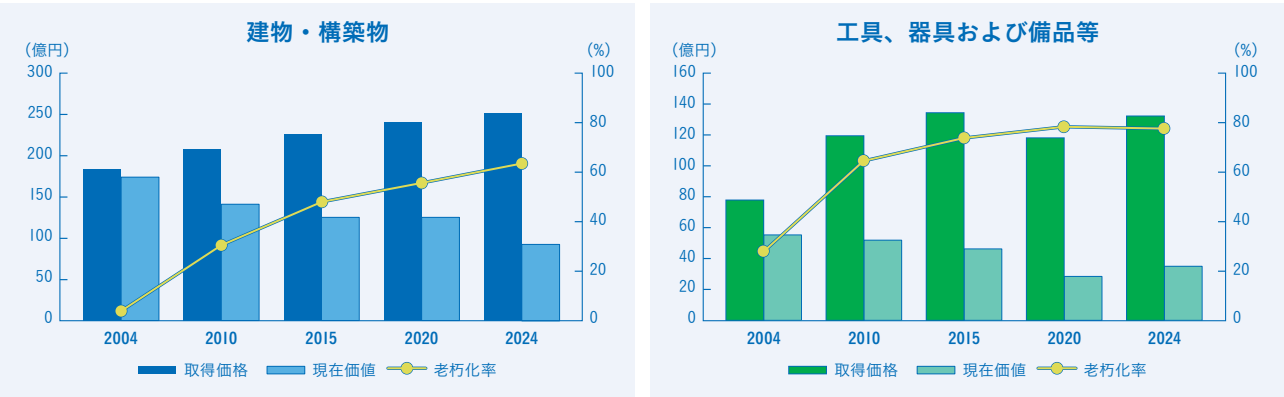
資産の構成

土地 33.6%、建物・構築物 33.9%、工具・器具及び備品等 11.4%、現金及び預金 17.1%、図書 1.6%、その他固定資産 1.8%、その他流動資産 0.6%

土地・建物・研究機器などの固定資産は、国立大学法人の使命である教育研究活動を行うための重要な基盤となっており、全体の82%を占めております。

※端数処理(切り捨て)に伴い、合計等は必ずしも一致しない。

施設等取得額・老朽化率の推移



POINT 2024年度 決算ポイント

大学全体としては建物等の老朽化が進んでいるものの、研究機器等の設備更新が行われている結果、大学全体の資産の老朽化率が抑えられており、**教育研究環境の維持につながっています。**

固定資産については、教育研究施設・設備の老朽化(減価償却)が新規取得額を上回った結果、前年度より約3.6億円減少する結果となりましたが、一方、当期末処分利益が約6.0億円増加しており、結果として純資産は約4.6億円増加となりました。

減価償却による老朽化等により教育研究活動が停滞しないよう、減価償却引当特定資産や目的積立金を活用しながら施設・設備の計画的な更新を進めてまいります。

収入と支出の現状

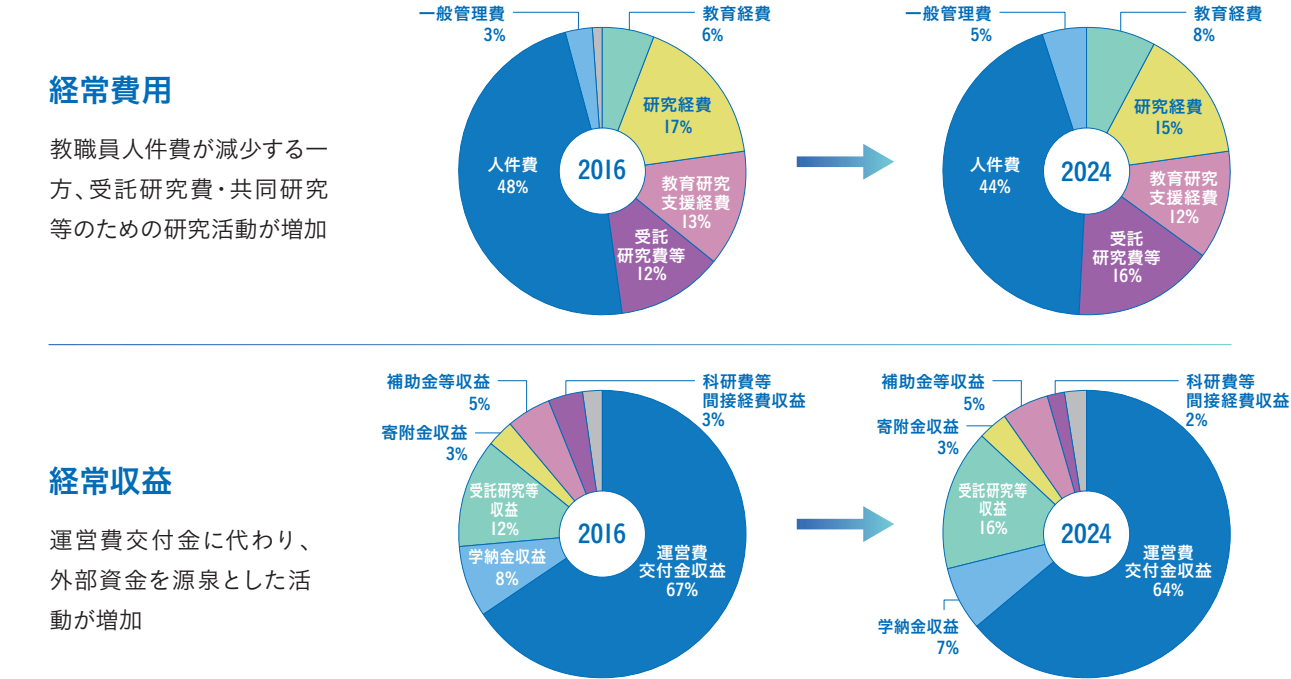
損益計算書(2024年度)				
単位:百万円				
費用の部	R6年度	(R5年度)	増減	
経常費用				
教育経費	671	(606)	65	
研究経費	1,280	(1,206)	73	
教育研究支援経費	980	(956)	23	
受託研究費等	1,394	(1,584)	▲190	
人件費	3,723	(3,715)	7	
一般管理費	393	(321)	72	
その他	33	(53)	▲19	
経常費用 計	8,477	(8,444)	33	
当期総利益	961	(361)	600	
合計	9,438	(8,805)	633	
収益の部	R6年度	(R5年度)	増減	
経常収益				
運営費交付金収益	6,011	(5,376)	634	
学生納付金収益	680	(677)	3	
受託研究等収益	1,479	(1,685)	▲205	
寄附金収益	313	(372)	▲58	
補助金等収益	509	(276)	232	
科研費等間接経費	180	(214)	▲33	
その他収益	232	(194)	37	
経常収益 計	9,407	(8,797)	610	
目的積立金取崩額	31	(8)	22	
合計	9,438	(8,805)	632	

POINT 2024年度 決算ポイント

財政効率化により管理的経費を抑えつつ、全学的な収益が増加した結果、**黒字決算を維持し、教育研究環境の整備財源を確保しました。**

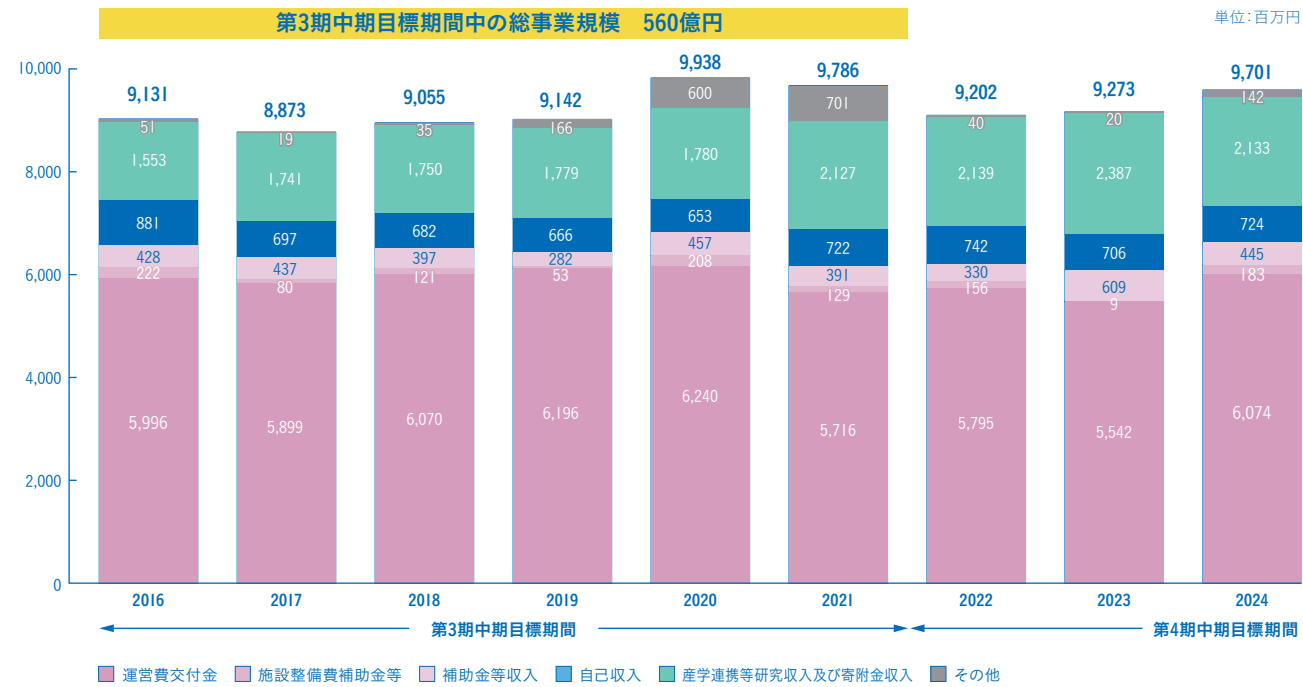
収益面では、設備更新のための運営費交付金や各種補助金が増加したことにより、前年度より約6.0億円増加となる一方で、費用面では、財政均衡化を図る各種施策の結果、管理的経費においてほぼ横ばいを維持しています。この結果、2024年度においては、約9.6億円の利益が生じました。当該利益は、次年度以降の事業の財源として活用できる目的積立金として申請し、施設整備等をはじめとした様々な事業を通じて今後の教育研究活動の推進に役立てる予定です。

第3期中期目標期間初年度(2016年度)との経常費用・経常収益の内訳比較

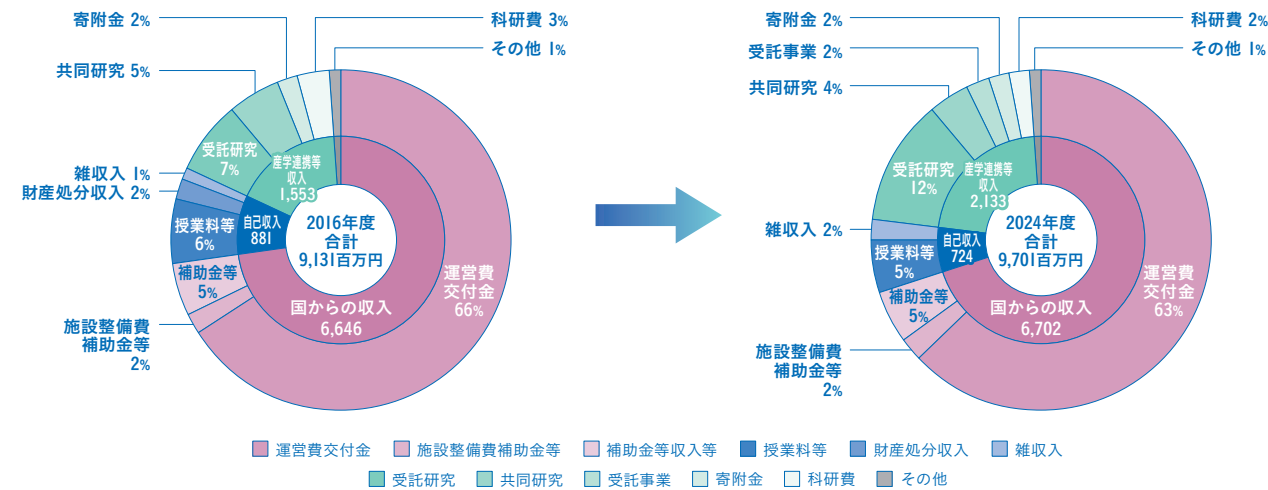


収入財源の多元化に向けた取り組み

第3期中期目標期間から第4期中期目標期間にかけての収入構造の推移



第3期中期目標期間初年度(2016年度)との収入構造比較



POINT 2024年度 決算ポイント

運営費交付金に依存した収入構造からの脱却を目指し、財源の多様化に向けて外部資金の獲得拡大を推進しています。

本学の収入は、主に運営費交付金をはじめとする国からの収入・自己収入・産学連携等収入で構成されており、多種多様な財源で様々な教育研究活動等が実施されております。収入の大半は、現在においても運営費交付金収入となっておりますが、第3期中期目標期間から第4期中期目標期間にかけて多様な財源確保を目指し

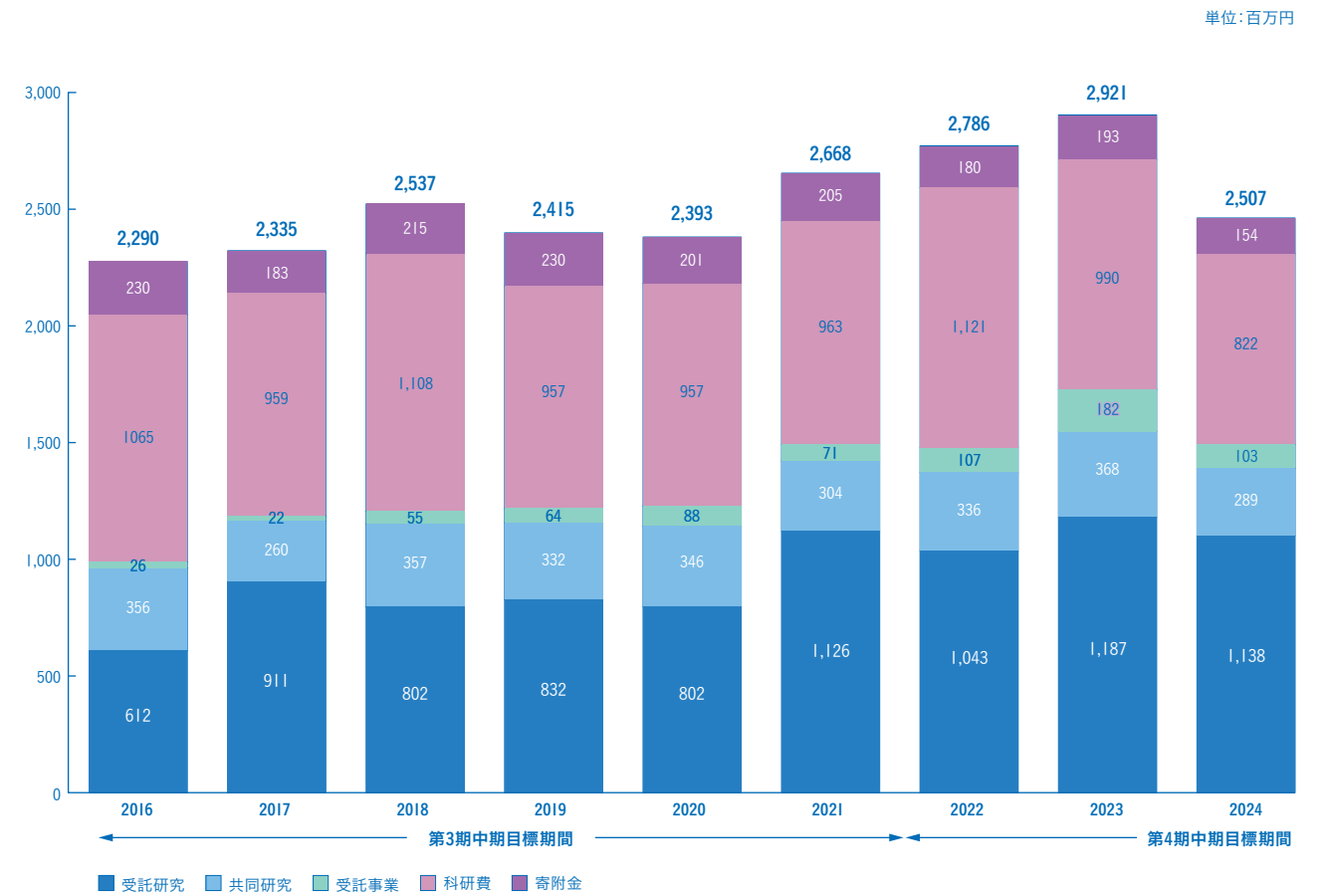
た結果、2024年度と第3期初年度を比較すると産学連携等収入の獲得額及び収入に占める割合が増加(獲得額約6億円増、収入に占める割合約5%増)しています。今後も、多様な財源の確保に取り組むことにより、第3期中期目標期間(2016-2021年度)における総事業規模(約560億円)を超える事業規模の拡大を目指します。

外部資金の獲得状況

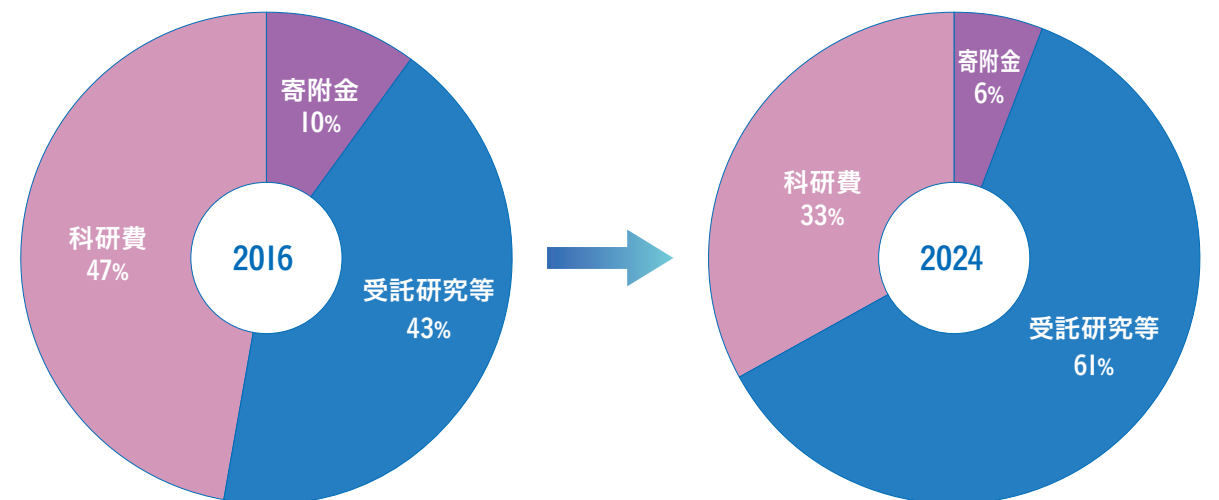
POINT 2024年度 決算ポイント

学長ビジョン2030に掲げる「財源の多元化による財務基盤の安定化」の実現に向けて受託研究費が引き続き第3期中期目標期間から大きく増加している一方、科研費の受入額が前年度から大きく減少し、研究資金の収入構造が変化しています。

第3期中期目標期間から第4期中期目標期間にかけての外部資金獲得額の内訳推移



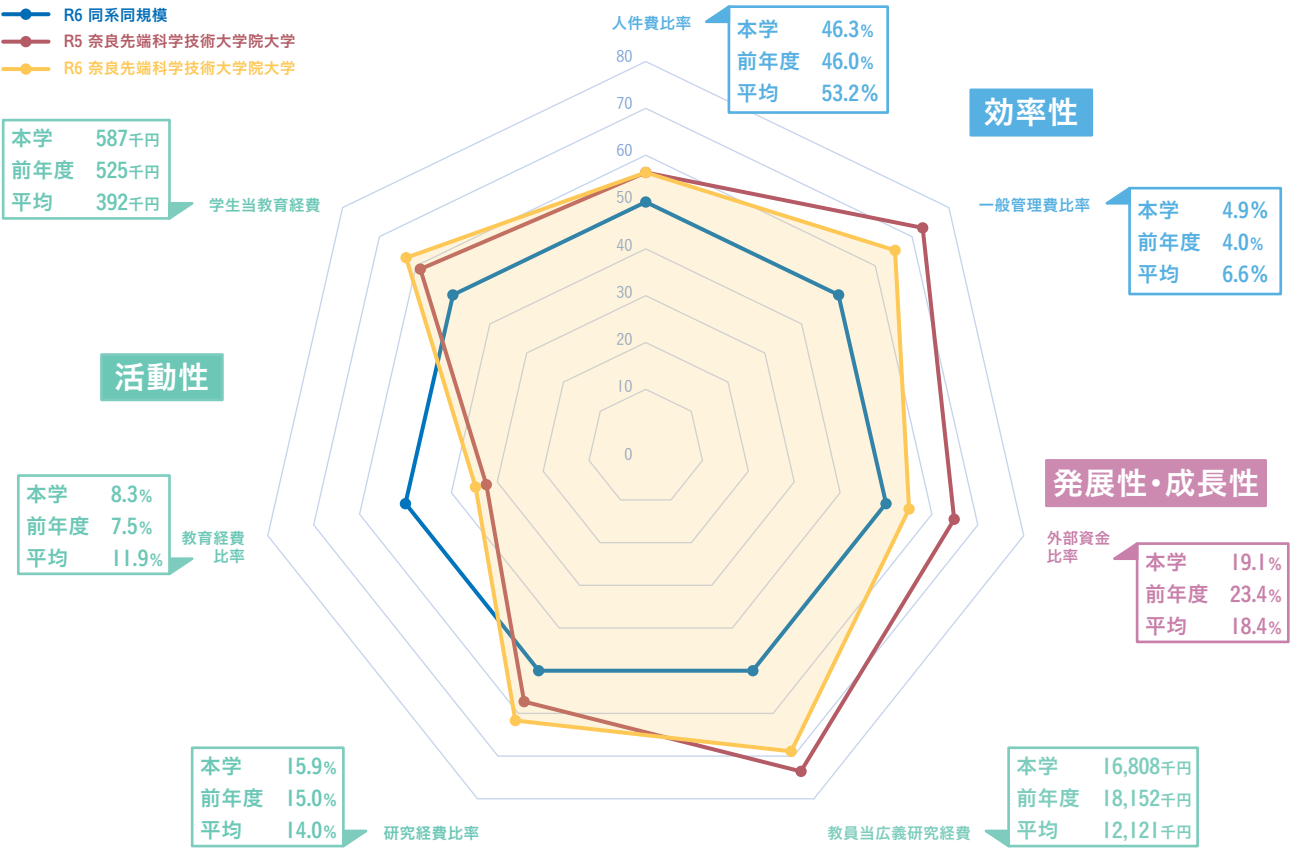
第3期中期目標期間初年度(2016年度)との外部資金獲得額の内訳比較



財務指標

本学と同系同規模※の国立大学法人の各指標を偏差値化して平均を50とし、財務的な視点から他法人との各指標を比較した2024年度における本学の特徴を表したものです。2024年度は、前年度と比較して外部資金比率、教員当広義研究経費は低下したものの、補助金等

が獲得できた結果、研究経費比率、教育経費比率は前年度より高い結果となりました。また、他法人との比較においては効率性及び発展性・成長性を表す指標において優位性を持っていることを示しています。



※病院を持たない自然科学系大学で、規模や専門性が近いと考えられる以下の8大学を抽出。
なお、平均値は、本学を含めた9大学の平均値。東京農工大学、電気通信大学、長岡技術科学大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、京都工芸繊維大学、九州工業大学、北陸先端科学技術大学院大学

項目	説明	
人件費比率	人件費÷業務費	業務費における人件費の割合を示す指標(低いほど良好)
一般管理費比率	一般管理費÷業務費	業務費における一般管理費の割合を示す指標(低いほど良好)
外部資金比率	(受託研究等収益+受託事業等収益+寄附金収益)÷経常収益	経常収益に占める外部資金の割合を示す指標(高いほど良好)
教員当広義研究経費	(研究経費+受託研究費+共同研究費+科学研究費補助金等(直接経費))÷教員数	教員一人当たりの広義の研究経費(研究経費、受託研究費、共同研究費と科研費直接経費獲得額の合計)を示す指標(高いほど良好)
研究経費比率	研究経費÷業務費	業務活動のうち、研究に使用される経費の大きさを示す指標(高いほど良好)
教育経費比率	教育経費÷業務費	業務活動のうち、教育に使用される経費の大きさを示す指標(高いほど良好)
学生当教育経費	教育経費÷学生数	学生一人当たりの教育経費を示す指標(高いほど良好)

奈良先端大における中長期的な財務戦略

中期目標の達成や学長ビジョン2030の実現には、中長期的に安定的な財源確保が重要な課題となっています。将来にわたって本学の役割を果たし続けていくため、積極的な競争的研究費の獲得に加え、産業界や地域社会との連携を推進することで、財源の多元化を図るとともに、資金獲得力の基盤となる教育研究環境の

整備に積極的に投資することで、財務体質強化の好循環に努めます。また、向こう5年間における中長期的な財政シミュレーションを定期的に更新し、役員間で共有することにより、中長期的な財務状況を俯瞰しながら問題意識を持ち、中長期的な事業計画のみならず、各年度の戦略的・計画的な予算編成に活用しています。

財務体質強化に向けた取組

収入獲得

- J-PEAKS(地域中核・特色ある研究大学強化促進事業)をはじめとする大型補助金獲得による教育研究基盤の強化
- 専門人材を活用したブランディング強化によるステークホルダーからの支援の拡充
- 課題創出連携研究事業実施や共同研究室設置による産学連携の推進
- 外部資金における間接経費率の見直し
- サポーター組織(奈良先端大サポーターズクラブ)による寄附金獲得強化
- ネーミングライツの拡充による民間資金の活用

支出管理

- 学長ビジョン2030実現に向けた重点配分や成果を踏まえた戦略的予算編成の実施
- 経常経費を含めたあらゆる経費の予算配分スキームの見直し
- 中長期的な研究設備更新プランに基づく計画的な予算配分
- 計画的な施設改修と節電WEBを活用した省エネ機器の導入推進

小谷 直和財務担当理事に聞く
奈良先端大の
財務状況について



本学ではこれまで、財務の安定性と将来性の向上を目指してきました。安定性の面では、中期的な収入見積りに基づく経費執行計画を学長・役員・関係職員の協働で策定・更新を繰り返すことで、急激な物価や人件費の高騰にも対応しつつ、さらに、最近では、人材の多様化促進など将来の発展に向けた予算や計画的な設備投資予算も計上できるようになってまいりました。また、フロー面のみならず、2024年度決算では、これまで減少が続いていた純資産が増加となり、少し明るい兆しが表れました。一方、今日の国立大

学の経営環境は、国の交付金や施設費の予算が増えないなか、諸物価や人件費の高騰により、「もう限界です」(2024年6月「我が国の輝ける未来のために」国立大学協会)と訴えざるを得ない状況に陥っています。本学の財務の安定性や将来性が増した背景には、既存経費の縮減・廃止や交付金の縮減を外部資金の獲得努力で補うことを教職員一丸で進めている実情があり、決して順風満帆ではありません。国立大学の使命である、高等教育及び学術研究の水準の向上を果たすには、大学が国の交付金予算が実質減少するなかで何とか踏みとどまっている状況では難しく、大学自身の成長が不可欠です。皆様におかれましては、本学が国立大学の使命を果たし得るよう、御理解・御支援を賜りますようお願い申し上げます。

SUPPORT NAIST

奈良先端大を
応援するカタチ

本学では、教育・研究活動ならびに人材育成についてさらなる発展をめざし、多くの皆さまからのご支援をいただきながら様々な取り組みを進めております。ここでは、本学の未来を支えていただける“応援のカタチ”をご紹介します。皆さまのあたたかいご支援をお待ちしております！

奈良先端大基金

<https://www.naist.jp/kikin/index.html>



世界トップレベルの教育研究拠点の形成に向け、本学における教育研究、社会貢献および国際交流の一層の推進ならびに教育研究環境の整備充実を図ることを目的とした基金です。使途を大学にお任せいただける場合は「奈良先端大基金」へ、特定の使途へのご支援を希望される場合は、ご希望の特定基金へご寄附が可能です。

詳細は上記 URL、
又は QR コードから



奈良先端大サポーターズクラブ

<https://www.naist.jp/naist-supporters-club/index.html>



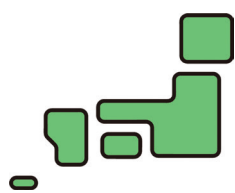
本学の人材育成の取り組みを継続的にご支援いただくとともに、会員の皆さまと大学、さらには会員間の連携を促し、交流や親睦、共創による相互の発展を目的としたクラブです。会員の皆さまに大学のリソースをご活用いただくための専用相談窓口の設置や成果報告会の開催、各種行催事へのご招待など、双方向のコミュニケーションを活性化することで、社会との間に「共創の輪」を広げていきたいと考えています。

詳細は上記 URL、
又は QR コードから



ふるさと納税

https://www.naist.jp/publications/sentan/WEB/topics/topics_33.html



生駒市のふるさと納税の使いみちに、「奈良先端科学技術大学院大学への支援」が追加されました。ふるさと納税を通じてご寄附をいただいた金額のうち、生駒市での必要経費を除いた金額が補助金として本学に交付されます。この補助金は、生駒市内をはじめとした住民の方々へ先端科学技術に関する教育の実施や地域の発展に活用させていただきます。

詳細は上記 URL、
又は QR コードから



編集後記

この度は「NAIST ANNUAL REPORT2025」をお読みいただき、誠にありがとうございます。
本レポートは、事務職員の主任・係員を中心とした有志による「アニュアルレポート制作ワーキンググループ」が企画・作成しており、本体制による2回目の発行となります。ご多忙の中、執筆、資料の提供、ならびに編集作業等にご協力いただきました皆様には、心より御礼申し上げます。
本レポートを通じて、本学の様々な取組や魅力が伝わりますと幸いです。

今回は前年度作成時から大きくメンバーが変わり、試行錯誤を重ねながら作成いたしました。経験年数や所属に関係なく1つのものを作り上げたことで、普段の業務とは違った経験や大きな達成感を得ることができました。

奈良先端大では今後とも2030年を見据えた「学長ビジョン2030」及び「共創」の理念をもとに科学技術の進歩と社会の発展に寄与できるよう取り組んでまいります。
引き続き、本学へのご理解・ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願いいたします。

※本レポート内で紹介している記事やデータは、主に2024年度のものですが、一部には2025年度の出来事も含まれています。

アニュアルレポート制作 ワーキンググループ

福本 好秀 / 谷口 佳乃子 / 稲葉 美穂 /
上田 雛子 / 江見 啓太 / 岡田 拓夢 /
高田 萌斗実 / 平石 健太 / 弓良 美桜



リンク集



奈良先端大公式 HP
<https://www.naist.jp/>



日本語版ガイドブック
<https://www.naist.jp/publications/guidebook/>



英語版ガイドブック
https://www.naist.jp/en/guide_book/guide_book.html



SENTAN
-NAIST WEB MAGAZINE-
<https://www.naist.jp/publications/sentan/WEB/index.html>

公式 SNS



X
https://x.com/NAIST_MAIN



facebook
<https://www.facebook.com/naist.jp>



YouTube
<https://www.youtube.com/user/NAISTChannel>



アニュアルレポートに関する
ご意見・ご感想は
こちらから！
<https://ssl.form-mailer.jp/fms/eddc894a837151>



国立大学法人 奈良先端科学技術大学院大学 | NARA INSTITUTE of SCIENCE and TECHNOLOGY

〒630-0192 奈良県生駒市高山町8916番地の5 TEL 0743-72-5111(代表) | <https://www.naist.jp/>